
ナーフフィア～三びきの勇者たち～

light

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナーフファイアー三びきの勇者たち

【Nコード】

N6018M

【作者名】

light

【あらすじ】

ここはポケモンたちが住む世界 「ナーフファイアー」
みんなが平和に暮らしている世界だ。しかし、その平和は悪の帝国
「レンア国」によっておびやかされようとしていた。

ごくごくふつーのポケモンのミウロ（ミズゴロウ）、ユー（シェイ
ミ）、エル（ピカチュウ）はなぜか悪の帝国のボスをたおすポケモ
ンにえらばれ旅に出た。

登場ポケモン紹介（前書き）

・ポケノベで連載中の小説です。こっちにもなんとなく載せてみることにしました

登場ポケモン紹介

光軍

主人公 ミウロ（ミズゴロウ） オス
のんきでさっぱりしていて勇気がある。何でも信じてしまうせいか、
だまされやすい。リンド村にエルとすんでいる。

ユー（シェイミ） メス

わががまできまぐれで負けず嫌いで泣き虫。いつのまにかミウロを
こき使っている
でも優しい面もある。どっかの国の王女さまらしい。

エル（ピカチュウ） オス
明るく、せきよくてきだがドジばかりする。寒がりで好奇心があ
る。

ミウロと一緒に住んでいる。

リーフ（リーフィア） オス

警戒心が強く、我慢強いが本当はさみしがり屋。
レンア国の兵士にリーフ以外の住民を連れ去られてからずっとひと
りで生きてきた。
でも、今はミウロ達と出あい旅に出る。

ホウオウ

「ナーフフィア」の神、アルセウスの使い。ミウロたちのよきナビゲーターとなる。光の国「ラウー国」の王。

アルセウス

右にかいたとおり「ナーフフィア」の神、悪の帝国をたおすためホウオウを使わせる。
はじまりの間というところでミウロたちをみまもっていて、たまに力をかしてくれる。

悪軍

グラ（グラエナ） オス

悪の帝国のボスでもあり帝王。ミウロたちの最大の敵。周りの国をつぎつぎとおそい、属国にして苦しめている。
世界せいふくをたくらんでいる。

ザン（ザンゲース） オス

グラの子分でいつもミウロたちのじゃまをしてくる。
でも本当は仲良くなりたいと思っている

このあともぞくぞく登場します！

登場ポケモン紹介（後書き）

光軍、悪軍は正義と悪をかつこよく？分けてみただけなのでストーリーには関係ないです。

第一話 虹色の羽（前書き）

ここから本編スタート！

第一話 虹色の羽

ミウロは、どこを向いても真つ白な場所をさまよっていた。でもとにかく前へ前へと進んでいるとまわりの風景がぱっと花畑にかわる。ミロウはここで夢のなかだときずいた。花畑を抜けると、小さな丘

に出た。その丘にはアルセウスがいる。ミウロはしらないけどどこかなつかしさを感ずるそのポケモンをまじまじとみる。

「あんだ、だれ？」

いきなり神に向かつては失礼な聞きかただ。アルセウスは苦笑（？）しながらも

「わ、わたしはアルセウスだ。まあこの世界の神だ」

「へー、で神ってえらいの？」

「（あたりまえだ）。実はきみにたのみがある」

アルセウスは質問には無視して話を続ける。ミウロはすこし気になったがまあいいやーときりかえた。

「で、なに？」

「悪の帝国をエルとユーといっしょにたおしてくれないか」

悪の帝国それは世界せいふくをたくらむ悪い国。それをばくが・・・

「ちょっとまってよ、どうしてぼくとエルと後、知らないやつがいかなきゃいけないんだよ」

「それは、使命だからだ。」

「意味がわからなっ・・・」

言葉を言いおわらないうちにアルセウスはまぶしく光りだすときえた。

消えた後にはきれいな虹色のはねがおちている。ミウロはそれをひろつと青くすんでいて晴れていた空から『そのはねをもってホウオウのところへいけ』とアルセウスの声がきこえたようなきがした。

あたたかな太陽がもうあたりをてらしていた。ミウロはまどからさしこんでくる日のまぶしさで目を

さました。虹色のはねはミウロの横にあったほつとしてとなり目を作る、よこには一緒に住んでいる

ピカチュウ、エルが寝ていた。

ミウロはエルの体をゆすつておこそうしたが、ばしっ、みごとエルのしっぽはミウロの顔に命中！

「いててて、エル！いいかげんおきろー！」

おこったミウロはエルをころがす。

「わーいやめてよー！」

エルはびっくりしておきた。ミウロは言葉どおりとめる。

「ねえエル、ぼくたちこれから悪の帝国をたおしにいこうよ！」

「どうしたの？いきなり」

「夢の中でアルセウスにたのまれたんだ。この虹色のはねをもって
ハウオウのところにいけて」

「アルセウスってこの世界のしこう神だよね！いいなーアルセウス
にあえたんだ」

「そんなにすごいのか？しこう神って」

ミウロはピンとこないようだ。エルはそれとはうらはらに目をキラ
キラと輝かせている。

「うん、でたおしにいくのはぼくはだんぜんオーケーだよ、だって
アルセウスから頼まれたんだしね」

ミウロはほつとする。ここで言っとくがエルはアルセウスのねっし
んな信仰者だ。

「ありがとう。エル、ぼくちょっと不安だったんだ。」

そして、ぼくたちは必要なものをリュックにいれ、村をでた。

これから、どんなことがおきるかわからない、でもがんばってきり
ぬけていこう

ミウロは心にそう誓った。

第二話 氷の森とシェイミ

ミウロとエルが旅立ってはやくも三日がたつ。2ひきはその三日間、とてつもなく広い野原を歩きつづけていた。

「はあはあ、もうだめだ……。」「

そう言ったミウロは草の上のうえに倒れむ。

「さつきも休けいしたんだけど、まあいつか。」「

エルはあきれ顔で言いながらミウロの横に座った。風がきもちいい。二ひきは少し休んでまた歩き出した。

カアカア

夕暮れも近い頃、ミウロとエルはぶきみな森の前にいた。

「い、いくの?」「

エルは不安げにミウロに聞く。ミウロはゴクリとのを鳴らすと、

「いこう!」「

いさぎよくエルの手を引いて森の中に入った。森の中に入ってまず感じたことは、こわいより寒い!だった。

「うっ・・さむいー。こういう時ホウオウがいればなあ」

エルはつぶやく、ミウロはホウオウときいてエルに聞こうとしていたことを、思い出した。

「あっそうだ。なあエル、ホウオウってどこにいるかわかる?」「

「しってるよ。光の国、ラウー国の王で、神の使いなんだ」

「ラウー国ってどんなところなんだろう」

「それはいつてのおたのしみさ。」

寒さに耐えながらも凍った道を歩いていると、むこうから怒りくるったユキノオーがとっしんしてきた。

「「うわあゝゝ！！にげろゝゝ！！」」

二人は、もと来た道を走りだした。

しかし、あともうちよつとで出口というところで、ユキノオーに回り込まれてしまった。

「仕方ない。戦おう！！」

と、ミウロが言うときユキノオーは、いきなり『ふぶき』を出してきた。二ひきは同時によける。

エルは「えいつ」と『かみなり』をうつ。『かみなり』は運よくユキノオーにあたった。ユキノオーは

大ダメージのような。それでもこうげきしてくる。

ミウロはそのこうげきをよけながら『すなかけ』を使い相手の命中率を下げていく。

「いいぞ！ミウロー」

いつのまにか二ひきの戦いになってしまったのをエルは応援していた。

「これでもくらえ！マンドショットー！」

『マンドシヨット』は見事ユキノオーにあたり、きぜつした。

「「やったー」」

そして二ひきはまた森の中をすすんでいった。

動いて少し暖かくなった。ミウロは気分がいい。でもエルは寒がりなほうで森に入った時以上に寒くて凍えそうだった。

それにミウロはきずいて声をかける。

「エル！だいじょうぶ？あつそうだ、毛布がたしかあったな・・・」

エルは寒すぎて答えられない。そんなエルをミウロはもうふをかけて温めてあげた。

どうしてこの森は冬でもないのにこんなに寒いんだろう。ミウロはあるきながら謎に思っていると、うしろからガササと音がした。

近よってみると、凍った草の上にみしらぬシェイミが倒れていたのだ。

「おい大丈夫？」

おい、おいとんでもミウロたちは呼びかけるがシェイミは目をさまさない・・・。

「たいへんだ！体がどんどん冷たくなってる。」

シェイミに毛布をかけていたエルがさげんだ。

「とりあえずシェイミをつれてこの森をでよう」

毛布でくるんだシェイミをエルがだき、その荷物をミウロがからうつ。荷物が増えつづれそうだったが、なんとかたえる。

「いそごう。日が暮れるまえに森をでないと」

ミウロは走りながら言う。太陽はもうしずみかけていた。

息が切れて呼吸がくるしくなってきた。肺がズキズキと痛い。ミウロはエルのほうを見る。エルもく

るしくて目がつづれそうだった、でも必死にシェイミを助けようと走っている。ミウロはその姿に勇気づけられた。

（エルはすごいな……。自分だって凍えそうなのにこんなにも知らないポケモンのために必死になっている。よし、ぼくもがんばらないと！）

それからどのくらい走ったのだろうか、やっと3匹は森をぬけた。気がつくともう薄暗くなっている。

ミウロはむこうにあかりがあるのをみつけた。

「むこうに明かりが見える！」

ミウロとエルはシェイミが生きてますようにといのりながらその明かりに向かって走り出したのだった。

第二話 氷の森とシェイミ（後書き）

続く！

第三話 キセキ（前書き）

第三話 キセキ

明かりのしよたいは村だった。急いでだれかのれんがの家のドアをミウロがたたく。すると、すこし太めのおばさんシェイミがでてきてエルのだいているシェイミをみる、

「ユー！」

エルがだいているシェイミ、ユーに涙目でだきつく。二ひきは突然のことだったのばう然としていると、ミウロたちがみているのにきずきコホンとせきばらいをした。

「ごめんね。びっくりさせてしまって、このこ（ユー）はうちの子なのよ」

「そうなんだ、それはよかった。この子、森でたおれてたのをもらたちがつれてきたんだ。でも・・・」

エルの続きにミウロが言う。

「なんだかひん死状態でもう体が冷たいんです。」

気の毒におもいながらミウロはそういうと確認でユーの体に手をあてた。もう森をぬけたのに、毛布でくるんでいるのに冷たくなっている。

「ミウロ？」

エルはミウロに声をかける。ミウロはエルに心臓の音をきいてと言

う。エルはそれとおりにユーの胸に耳をあてる。心臓は今にも止りそうだったがまだ動いている。

「どうですか。うちのシェイミは」

おばさんシェイミがお医者さんに聞いているような口調をした。

「まだ生きてる。医者はどこですか？」

「医者ならうちのとなりのとなりです。」

おばあさんシェイミはそういうと「こっちです」と案内する。

ユーはもうろうとした意識のなか考えていた。何を考えていたかというと、夢で大きな光輝く塔での出来事だ。そこで、光の国の王、ホウオウにあった。

塔の最上階でそのホウオウは言った。

「虹色のはねをもったポケモン達と悪の帝国をたおしてほしい。」

虹色のはね。どこかで見た気がする……。

ミウロたちは（どうみてもふつうなレンガづくりの家）病院の中でユーの治療がおわるのをまっていた。ミウロはなぜか胸騒ぎがしている。エルは不安そうにこちらを向いた。

「ユーだいじょうぶかな……」

「きつと助かるよ、」

「うん。そうだね、きつとたすかるさ!」

エルは明るく言う。そして、ユーを抱いたラッキーが診察室からでてきた。おばさんシェイミは一番にかけよる。

「どうなんですか?」

ラッキーはくらくかおで、

「ごめんなさい。間に合いませんでした。」

それだけいうとミニベットにユーを寝かせた。エルとミウロはショックをうけた。

ミウロはおばさんシェイミに向かってあやまる。

「すみません!ぼくたちがもうちょっとはやくみつけていれば・・・」

「いいのよ。もう」

そのとき、なにかが光った気がした。ミウロはいそいでバックのなかを見る。

「虹色のはねが光っている!」

エルとミウロは同時にさげんだ。虹色のはねをミウロは出してみると、

はねから出ている七色の光がユーをつつむ。

「「「「！！！」」」」」

その光はユーをつつんだあと消えた。それと同時に目を覚ます。

「あれ。ここどこ？」

「ここは村の病院です。」

ラッキーが答える。ユーはミウロの持っている虹色のはねをみると、決心したように口を開いた。

「うち、悪の帝国をたおす旅にでないといけないの。だからばあ、（おばさんシェイミ）しばらく家をするにするわ。」

突然言ったにもかかわらずおばさんシェイミはやっぱりねと言うとまるで最初から分かっていたように荷物の入ったバックをわたす。ユーはおどろきおばさんシェイミに聞く。

「ばあ、どうしてしっていたの。」

「なんとなくそんな気がしてたのよ。あなたはいつか旅立つと、ね。」

ミウロは二ひきの会話をききながら（ユーっていう名前どこかで聞いたような・・・）

もうアルセウスに会った時のことを忘れかけていた。そしてひと息つき、とりあえずユーの部屋で自己紹介。

まずミウロからだ。（ミウロたちはユーの家に泊まらせてもらった）

「ぼくはミウロ。えーと、これからいっしょにがんばろうな。」

「おいらはエルだよ。おたがい協力していこう！」
ふたりはにこにこしながら言いおわる。

「うん。よろしく！うちはユー、ジェイル国からこの村にきたの。」
国とかに興味をもつエルはジェイル国のことを聞く。

「ここがレインド国でしょ、ジェイル国ってけっこう遠いんだよね。
ねえどんな国だったの？」

「んー、気が向いたら教えるわ」

ユーは気まぐれのような。エルは気長に待つことにした。

それから三匹はわいわいやって夜3時ごろやっと眠りについたのだ
った。

第三話 キセキ（後書き）

感想やアドバイス、なんでもいいです。

ぜひともお願いします！！

第四話 海の里、テイルシティ

次の日、ミウロたちは村をでた。村をでるとまた森がある。ミウロはうんざり気味で、ユーはとうとうなんだか張り切っている。

「二人とも、どうしたの？あまり浮かない顔してるけど。」

ユーはミウロとエルの顔をのぞきこんで言った。ミウロはそれに答える。

「どうしたもこうしたもないよ。昨日やっと森を出たと思ったら、また森なんだよ。なあ、エル。」

「まあ、いいじゃん。明るく行こうよ。これからも森はいくつも通ると思うし。」

「うん。そうだな。前向き、前向きだ！」
ミウロは笑いながら言った。

そうこうしている内、わずかに十分で森の出口が見えてきた。ミウロはうれしくなって、走り出す。

「まってよー。」

エルとユーが後から追った。

森をぬけると、高台に着いた。すぐ右どなりには、石でできた下に続く階段がある。

ミウロ達は下に見えるのどかな町と、初めて見る、青いのがどこまでも広がっているのを見た。

「ユー。向こうに見える青いのって何か分かる？」

ミウロが聞く。ユーは顔をしかめながら、

「うーん……。なんだろうね。うちも初めて見たもん。」
「どうやらユーも初めて見るらしい。」

「じゃあ、とりあえず下に降りよう。」

エルがそう言って、三匹は下に降りて行った。

下に降りると、「ようこそ、ティールシティへ」と書いてある看板があった。

「ふーん。ここはティールシティなのか。」

ミウロがつぶやく、エルは看板に書いてあるティールシティの案内を読む。

「ここ、ティールシティは「海」がすぐそばにある港町です。海が近いので、水タイプのポケモン達が多

く住んでいて、漁業が盛んな所です。見どころは何と言っても、

「海底の村」！だって。海ってあの、青くて広いやつのことかなあ。

「

「どうだろうね。うちは違うと思うな。それよりも「海底の村」ってのが気になる。」

そしてミウロ達は、のどかな住宅地を歩きだした。たまにすれ違う見たことのないポケモン達の視線を感じながら、ミウロはエルに話しかける。

「僕らって、珍しいのか？」

「僕らっていうか、旅人だよ。まあ、珍しいんじゃないのかな。何かじろじろ見られてるし。」

「そっかー。たしかに観光客とか来なさそうだモンな」

ミウロは失礼だとは知らず、どうどうと町のポケモン達の前で言うと、ユーが顔をしかめてミウロの腕をつつく。そして小声で、

「ミウロ！ここのポケモン達に失礼でしょ！」
そう言っで、ミウロの足を踏む。

「いってー、ごめんって。ぼくが悪かったよ。」

「もう、まわりから睨まれてるじゃん。」

ユーはぷいっと顔をそむける。

「ははは………」

どうすればいいか分からないエルは苦笑いするしかなかった。

ザザーン……。ザザーン……。

三匹はついに青くて、広い「海」という所についた。

「うわあー。きれいだなー。」

ミウロは初めて見るキラキラと輝く青い「海」を見て感動していた。
エルは得意顔だ。

「ね、おいらの言うとおりだったでしょ。」

「はいはい。そうでしたね。」

ユーは悔しいのかてきとうに交わした。

そして海にそろそろと近づく。波が寄せたり引いたりするのが少し怖い。ミウロは思い切って、寄せたり引いたりしている波にさわってみた。

「冷たいっ。ん？これ水じゃないか！」

「「水!?!」」

びっくりした。まさか水だったなんて……。次はユーが海の水をなめてみる。

「どう？おいしい？」

エルが聞く。ユーはまずい！というような顔だ。

「ぺっぺっ。かなりしょっぱいわ。」

「あたりまえよ。そんなことも知らないの？」

こどかい誰かの声が後ろからした。三匹は振り返る。

「なんだよ、仕方ないじゃないか。僕達、初めて海をみたんだぞ。」
ミウロは力チンときたか、目の前にいるナメクジみたいなピンク色をしたポケモンに言い返した。

「まあ、まあ、落ち着いて…。」

エルがミウロを制する。生意気そうなそのポケモンの隣には同じくナメクジのようで青色をしているポケモンがピンクの方に注意する。

「おい、カカ。頼みごとをする奴らにそういう事を言つと、また断られるぞ」

「…ごめんなさい。なんかあたし、ついつい言ってしまうの」

反省したピンクのカカはミウロ達に謝る。

「いいんだよ。もう、それより頼みごとってなに？」

エルは穏やかにカカに言つた。それに青い方が答える。

「その前に名前を覚えておくよ。オレはカラナクシ種族のトト、で隣のピンクの方もカラナクシ種族で力カって言つんだ。」

「よろしくね。ついでにあたし達、ふたごなんだ。」

「ふたごなんだ。よろしく。僕はミスゴロウ族の、ミウロで、」

「うちはシェイミ族のユー。そして黄色いのはピカチュウ族のエル、どんな頼みごとでもOKだから！」

ユーはそう言つてウインクを決める。

どんな頼み事でもいいと聞いて、カカは涙を浮かべながら、

「ありがとうございます！それで頼み事は、あたし達の大切なお母さんのかたみが盗まれたんです。だから、それを取り返してください！お願いします！」

「ぼくはいいよ。エルとユーもいいよな？」

「うん！」

こんどはトトが嬉しそうに言う。

「ありがとう！こんな心やさしい人達がいたなんて・・・。」

トトは涙目になっていた目をふくと、「オレについてきて」と言い、向こうにある林へとミウロ達を案内する。

その、うしろ姿を見おくる怪しいかげがいた。

第五話 カタミを取り戻せ！（前書き）

久しぶりの最新です！

第五話 カタミを取り戻せ！

一行は涼しい林の道を進んでいた。

「お兄ちゃん。ほんとにこっちだった？」

カ力は心配そうだ。兄のトトは自信満々に後ろ、カ力、ミウロ、エル、ユーの方を向く。

「間違いない。たしかに、カタミを盗んだやつがこっちに行くのを見たんだ。」

「じゃあ、心配ないね。早く先に進もうよ。」

ミウロがせかす。そして、トト達はまた歩き出した。

「ついた、きつとやつはここだ。」

トト達は林の奥の、レンガでできた、視るからに豪華なお屋敷の前にいた。そして、トト

が、扉を勢いよくバンと開ける。中は薄暗く誰もいないようだ。

「やったあ。ついてるぞ。今のうちに早く取り戻そう。」

一番にエルが駆けだす、カ力も早口で、

「うん。ここのポケモン達が帰ってくる前にね。」

と言うと、他の皆もエルについてきた。お屋敷の中にはいるとまず
広間があり、ミウロ

達は、正面にある大きな階段を駆け上る。ユーはその二階から下の
広間を見てみた。

「う。たつ、高い。二階と言うより三階なんじゃないの。」

「ユー、もしかして高いとこニガテ？」

カカがからかうように聞く。それをみたトトは「こら、カカ！」と
カカを叱った。

ゆっくりしている暇もなく、つぎつぎと部屋を見て回るのだが、ど
こもハズレのようだ。

「なんだろう？これ。」

エルは壁にあるひもを引っ張ると、ガンと上から降ってきたカケラ
が見事エルの、頭に

直撃。そのあと、エルの正面の壁が崩れたのだ！

「いったあ。ん？壁が！」

「いや、みて。ドアらしきものがある。」

ミウロはそう言うと言の壁のガレキを払いのける。すると、ミウロの言
った通り、古い木材の

ドアがでてきた。

「「おおー」「ナイス！エル、ミウロ。」

「ありがとう。よし、開けるよ。」

ギー、長く使われていなかったのかミウロの開けたドアは不気味な音を上げる。

部屋の中には驚くほどのキラキラとした宝やビー玉が積み上げられていた。

「すごい……。こんなにあるんだ。」

エルはホォーと息をつく。その時、バサバサバサアと大きな黒いカラスのようなポケモン

が開いていた窓から勢いよくトトのところへ突っ込んできたのだ！

「こらああ、泥棒！勝手に入るんじゃないーい！」

その大きな黒いカラスポケモン、ドンガラスは怒鳴りつける。

「泥棒はどっちだよ。オレ達の大事なかたみを盗みやがって。返せよ泥棒！」

トトもドンガラスをよけ、負けずに言い返す。

「ふん。わたくし、ずっとあなた達をつけていたのよ。この家に着くまでね。」

「そうか、どおりで変な気配がしていたと思った。」

カカはつぶやく。その横で、ユーはミウロに声をかける。

「うちのバック取り外してよ。」

「うん。」

ミウロはユーがつけていたバックを、外してあげた。

ドンガラスは、積み上げられた宝やキラキラしている物の前に立ちただかる。どうやら

簡単には返してくれそうにない。ドンガラスはニヤリと笑う。

「カタミという物を返してほしいのなら、わたくしを倒してごらんなさい。」

「受けて立つ！」

エル、ミウロ、トト、カカが前に踏み出す。ユーはやる気ナシといったところか、後ろで

「がんばってねー。」

と手を振っている。

「わたくしからいきますよ。』はがねのつばさ『」

ドンガラスは片方の羽を光らせながら、ミウロに向かってくる。ミウロは真正面から、

『みずてつぽう』を出した。

「こんなもの！」

バシユッ

ミウロの出した『みずてつぽう』は光っているつばさの方で切り裂かれ霧のようになる。

「何?!」

ガシン、ドンガラスの攻撃はみごとにミウロの腕に直撃した。

「ぐっ・・・」

「大丈夫か、ミウロ。くらえ『みずのはどつ』」

「おいらも！えい『10万ボルト』！」

二ひきの繰り出した技は重なり合いドンガラスの右翼にあたった！

「ううー、やるわね。次はこっちの番よ『つじぎり』」

小さい竜巻のようなものがドンガラスのはばたく風からどんどん飛び出してきて、

ミウロ達に止まることなく次々と来る。ミウロとエルはうまくかわしていくが、トトと

カ力は『どろばくだん』を打って消していく。ミウロは攻撃をかわしながらエルにささや

いた。

「エル。『かみなり』をだして、僕は『とっしん』で突っ込むから。」

「うん。分かった。いくよ」

バリバリバリ！エルは、『かみなり』を打った。ドンガラスはあせって攻撃を一瞬止めた

その時！「たあああ」ミウロがドンガラスに、おもいきり『とっしん』でぶつかる。

ドンガラスは跳ね飛ばされ、キラキラ宝の山に突っ込んだ。そしてエルのはなった

『かみなり』はドンガラスに命中した。

「わ、わたくしの負けです。どうぞカタミは返します」

ドンガラスはよろめきながらも、水のかたちをしたブローチのカタミをどこからか取り出

すとカ力に渡す、そして 窓からふらふらと逃げていった。

「もう泥棒とかしないでよねー。」

カ力は逃げていくドンガラスに笑いながらいう。

「よかったね。取り戻せて。」

エルはまるで自分のことのように喜ぶ。

「これも、うちらが協力したおかげよねー。」

ユーは得意げ顔で言った。そこにユー以外が、

「「「お前、何もやってないだろーが」「」「」

と突っ込んだのだった。

見事カタミを取り返した五匹はお屋敷をあとにしながらか、改めて喜びをトト、カ力は

かみしめる。

「やったー！。とりもどせたー」

「ありがとう。ミウロ、エル、ユー。ほんとありがとう。」

「いいんだよ。おいら達、役に立てれたし。」

「うん、うん。これから大事にするんだよ。」

「また取られないようにね。」

最後にそう言ったユーは続けてカ力を「なめくじー」とからかう。

「なめくじじゃない！カラナクシィー」

カ力は林の出口にむかって走って逃げるユーを追いかけた。

「やれやれ・・・」

トトはカ力達のやりとりに肩をすくめている。ミウロはのんきにエルとしりとりを

しながら歩いていたのだった。

第六話 巨大メノクラゲ、ザン登場

ティールシティ北部の、広い川沿いにある一軒家ここがトト達の家だ。ミウロ達はトト、

カカの家で、昼ごはんをごちそうになっていた。

「ねえ、あんた達って、何人家族なの。」

ユーはおにぎりをセカセカと食べながら聞く。トトはそれにあきれながら答える。

「いちおう三人家族だよ。オレとカカと父さんでね。」

「まあ、ほとんど二人なんだけど。パパ、帰りが遅くて行くのも早くてなかなか会えない

くて。」

カカもユーに負けずにおにぎりをつぎつぎと、取っては食べる。

「あ、そういうば僕達、ラウー国に行きたいんだけど。どの道をいったらつく?」

ミウロはカレーを口に運びながら言った。それにトトが答える。

「ラウー国かー。あの光の国だね。うーんと……。確か地図があったな。」

トトは台所を出ていく、そしてしばらくすると世界地図を背中に乗せて持ってきた。

「これに載っているはずだよ。」

エルがトトの地図を取り、テーブルの上に広げた。ミウロ達はその地図を取り囲むように

して、のぞきこむ。ちなみにここ、レインド国は地図の一番東の大陸の端っこにのつてい

た。

ユーがそのレインド国に指を置く。

「今はここでしょ、で、ラウー国は……。」

ユーより先に、ミウロがレインド国から西の方にラウー国を見つけた。

「あつた。真ん中ぐらいの所か。」

ミウロは、三つある大きな大陸の真ん中を指差す、その下には「ラウー国」と書いてあ

った。みんなはレインド国とラウー国を交互に見る。レインド国は東の小さめの大陸の

一番はしで、ラウー国は真ん中の大きな大陸の中心部にある。

「・・・遠いね。」

エルがつぶやく。ユーはミウロの足を踏むとミウロのひれをつかむ。

「ミウロ、どうやってラウー国に行くか考えなさいよ。」

「いたたた。分かった、分かったから。やめろって」

パツ、ユーはミウロのひれをはなす。（ほっ・・・。）

「エル、ラウー国へのルートはさ、ここから西の大陸へいこうぜ。」

となりでユーがうなずくのをみながらエルに言う。

「いいよ。でも船がないと向こうの大陸へは渡れないね。」

「だいじょうぶ！うちんちの隣のおじさん、船の船長なの。だから頼めばきつとつれて

いってくれると思うよ。」

カ力はそう言う、「つれてくる。」と急いで家を出ていく。

「おいら達も行こうよ。」

「」「うん」「」

そして、他のみんなも家を出ていった。

隣の家はすぐ右どなりにある。家をでると、隣の家のポケモン、ペリッパーとカカが話

をしているのが見えた。ミウロ達はカカがいる隣の家に駆け寄る。

「お兄ちゃん、みんな。来ちゃったんだ。あ、紹介するね。この人、ペルポシップの

船長、タロウさん。」

「やあ。」

タロウさんは、ペコリと頭を下げる。ユーが（ベタな名前だなー）
と思っていると、

待っていた返事が来た。タロウさんはミウロ、エル、ユーの方を向くとニツコリと笑顔を

見せる。

「キミたちだね、西の大陸に渡りたいのは。」

しかし、実はタロウさんはトトに間違えて言っていたのだ。

「え?! オレは渡らないんだけど・・・」

「おおっと、失礼。」

コホンとせき払いをして、改めて三匹の方を向く。

「キミ達、だね？」

「「はい！」」

「僕達ラウー国、光の国を目指しているんです。」

「へえ。光の国かー。いいねえ。おじさんも行ったことがあってね・
・・・」

なっがーくなるので以下しゅうりゃーく。

「はあー、やっとおわったー」

ミウロは船の中の自分の部屋につくや、そばにあったベットに倒れ込む。

タロウおじさんの話はなんと薄暗くなるまで続いてしまった。まだ見知らぬ大陸

の話だったので、ミウロ達もついつい話にのめり込んでしまったのだ。

トントン

ドアをノックする音が聞こえた。

「だれだろ。どうぞー。」

ドアが開く、そこにいたのは慌てているユーだ。

「大変！エルがいなくなっちゃったのよ！」

「エルが？！とにかくタロウさんに知らせよう。」

「うん。」

ボタン、ドアは乱暴に閉まりニひきは慌てた様子で廊下をどたどたと走っていった。

時は昨日の昼間にもどり、場面は悪の帝国、レンア国のボスの基地・
・。

今、一匹のザングース、ザンが「遅刻しちまった」。と急いで黒いブラックホールのように

な穴に飛び込んだところだ。

ボス、グラエナのグラは見た人が震えあがるような鋭い目つきを今来たばかりのザンに

向ける。

「ザン！また遅刻をしたな！！」

「ふえー。ごめんなさい！次から絶対に遅刻しませんから。」

ザンはへこへこと土下座をする。グラはフンと鼻をならし、ミニテレビをザンに投げた。

「これは？」

「ちょっと見てみる。」

テレビ画面の下にあるボタンを押す、するとどこで録画したのだろうか、画面の中には、

ミズゴロウ、ピカチュウ、シェイミがどこかの村をでていく様子が映った。

「なんかマヌケづらっすねえ。こいつらがどうかしたんですか？」

グラはしかめっ面でザンの持っていたテレビを取り上げると、画面の中の三人組を指

差す。

「あのな。お前、こいつらを倒してこい。」

「なんですか。突然」

「こいつらは、あのアルセウスに選ばれ、オレ達を倒そうとしている奴らだ。」

「アルセウスに、ですか?!でもこのミズゴロウ達かなり弱そうっすね。」

「そうオレも思うのだが……。まあいい、特にミズゴロウには気をつける。何か不思議

なパワーがある気がするからな。」

「はい！じゃあ行ってくるっす。」

ザンはビシッと敬礼をして、そそくさと基地を後にしたのだった。

時はもどり、ミウロ達はタロウさんが運転しているところに来た。

「どうしたんだね。そんなに慌てて。」

「どうも、こつもエルが居なくなっただですよ。」

と、ユーが早口で言う。ミウロはタロウ船長に近づく。

「心当たりはない？。」

「ない。」

きつぱりとタロウ船長が言うので二ひきはすっかりこけてしまった。

「あーもう。とにかく探しに行くわよ。」

ユーはミウロの腕をひっぱり走り出す。タロウ船長はあまり深く考えないなかったのか

舵とりを続けた。

廊下の角をミウロとユーが曲がると、デッキに出れるドアがあった。ミウロが急いでそ

れを開けようとした時、

ギシギシギシ・・・と変な音がして船が傾き始めたのだ。

「はやく！ミウロ。」

ミウロはドアをあけ、二ひきはデッキにでた。外は真っ暗で最初は何にもみえなかったが

時間がたつにつれ、音と船が傾いている原因がわかった。

「！」「なんだ。ありゃ！」

そう、巨大メノクラゲが長いツルで船を縛っていたのだ。そしてなんとエルがメノクラゲ

に捕まっていた！

「おい。その巨大！エルと船を離せ。」

ミウロは『みずてっぽう』をエルが捕まっているツルに思いっきりぶつけた。

ユーも参戦してくれ、『エナジーボール』を相手の目に向かって放つ。

ドシュッ

『エナジーボール』がメノクラゲの右目に当たり、メノクラゲはひるんだ。

「エル。今のうち！」

ミウロがさけぶが、エルはどうやらきぜつしている様でうんとも、すんとも言わない。

「ミウロ、どうやってエルと船を助けるのよ。」

ユーは何かしなさいよ、とでもいうような顔をする。

「どうやってって言われても・・・」

ミウロが困った顔をしていると、また船が大きくゆれ、二ひきは海に落ちそうになる。

「うわ、危なかったー。」

デッキの手すりにつかまった。すると、いつの間にかタロウ船長もメノクラゲに捕まって

いたのだ。

「おーい！たすけてくれえー。」

タロウ船長は一生懸命もがくが、メノクラゲのツルは、しっかりと掴んでいてどうにも

ならない。

「そうだ。タロウ船長　！。ひこうタイプですよねー！ひこうタイプの技、強力な一発

お願いしまーす。」

ユーが大きな声で叫んだ。タロウ船長はコクンと大きくうなずくと、ツルでぐるぐる巻か

れている羽のまま、『つばさでうつ』をだす。すると見事その勢いでツルが外れたのだ！

「ようし。ありがとう、ユーくん。」

タロウ船長はバサバサと音をたてながらミウロの横に降り立った。

「くっそおー。にげられたー！」

少年のような声がメノクラゲの方から聞こえた。

「？。メノクラゲがしゃべったのか？」

しかし、ちがったようで、メノクラゲの頭の上に登ってきたザングースの声のようだ。

「ちげえ、オレだ。オレはザングース族のザン。仲良くしようぜ。」

「へえー、ザンか。ぼくはミズゴロウ族のミウロ。よろしくー。」

ミウロは笑顔であいさつをする。その横でユーはあきれていた。そして小声で

「ばっかじゃないの。ミウロ！あいつはうちらを殺そうとしていた奴よ。」

「そうなのか？！僕、本当に友達になってくれるのかと思った。」
それを聞いたザンはフンとバカにしたように笑う。

「おいおい、まじかよ。さっきのは単なる冗談に決まってるだろ。ハハハハ！」

「笑うなよ！こんにやろお」とっしん」

ムカついたミウロはうおおおと言いながら、バシッインとメノクラゲにあたる。

「うわわ。」

メノクラゲはグラッと傾きザンは体制をくずし、その衝撃でツルは船から離れ、ついで

にエルも離す。ミウロは海に落ちていくエルの後を続くように落ちていく。

「エルー！」

ミウロは海に落ちる前にエルの腕をつかんだ。そして、海に二ひき

同時に落ちる。

「だいじょうぶかー。」

船の上から、タロウ船長がのぞいていた。ミウロは何とか水面から顔をだす。

「ちっ、沈んどけよ！メノクラゲ『なみのり』！」

ザンがメノクラゲに指示をした。メノクラゲは黙って大きな波を作り、それはミウロと

エルにザッブーンと覆いかぶさった！

「ミウロー。エル！」

ユーが叫んでいる。ミウロは水タイプだからだろうか、水の中に押し込まれただけで、

息もでき、別にどうって事なかった。でも、エルは電気タイプだ。水タイプではないので

このままだと死んでしまう。

「何とか上にいかなきゃ。」

ミウロはエルをひっぱり、海面から顔を出す。そしてエルを浮かせてやる。

「エルくんはだいじょうぶかね。」

ユーが上で戦ってくれている内にタロウ船長が来てくれた。

「わかりません。でも、早く船へ運んでください。」

エルをペリッパーの広い口の中に入れる。そして、タロウ船長は急いで船に運んだ。

ミウロはザン達の気をそらすため、メノクラゲの周りをぐるぐると回ってみた。

「やーい、巨大野郎！」

そう言いながら。

相手はミウロにきずく。メノクラゲはザンに指示され、『ちょうおんぱ』を打ってきた。

ちょうおんぱはミウロにあたってしまう。

「うつ、頭が……。」

頭がふらふらして、なにも考えられない。ミウロは海の中へ沈んでいった。

ユーは沈んでいったミウロをながめ、メノクラゲの方を向く。

「ああ、もう！こうなったら『シードフレア』……！」

ドカツ、ユーの繰り出した『シードフレア』はメノクラゲのきゅう

しょ、赤い目のような

物にあたった。

メノクラゲは大ダメージを受け、横にズズズーと倒れる。

「おわっ、メノクラゲ！くそ、よくもやって、！！」

ザンはびっくりして動きを止める。その後ろにはミウロが至近距離で、『みずてつぽう』

を、はなっていた。

「うわあああ！」

『みずてつぽう』を真後ろから受けたザンは空の彼方へぶっ飛んでいった。

「やったあー！」

ミウロはガッツポーズを倒れて浮いているメノクラゲにのって決める。ユーもデッキか

ら、

「ナイス！ミウロ！」

とGoodのサインをした。

ミウロは、だんだんメノクラゲが心配になってきた。いくら敵とは

いえ、気絶しているの

だ。だから、さっさと船のデッキに飛び移る。高さや近さがよかったから、うまく飛び

移れたのだ。

そして、ミウロとユーはバトルが終わって一安心しながらも色々話ながら船長室

に入る。エルとタロウ船長が中にいた。

「エル！よかった、助かってたんだ。」

ミウロがエルに抱きつく、ミウロは安心しながらも、これだけは不安だったのだ。

「まったく。こっちは、大変だったんだから。」

ユーが、「もう」と言いながらも、顔は微笑んでいた。

「ごめんね。心配かけて。」

エルは謝り、「ありがとう。」と付け足す。三匹の様子を見ていたタロウ船長は、

「よかったね。さ、もう寝なさい。」

と申し訳なさそうに言うと、船の舵とりを再び始めた。

「「「じゃ、おやすみなさい」「」」

ミウロ達はタロウ船長の後ろ姿に声を合わせて、あいさつをした。そして、顔を合わせる

と、笑いながら廊下を歩いていく。

ミウロは自分の部屋の前に来ると、二人に、

「おやすみ。また、明日。」

と手を振り、部屋に入る。

いつの間にか、窓からは、もう朝の陽ざしがほんのりと差している。

ミウロはファ　と大きなあくびをして、ベットに倒れ込み、そのまま深い眠りに落ちて

いった。

第七話 ニシユマル國、マシユマロシティ！ピナとの出会い（前書き）

久々の最新ですね

ひまあつたら感想くださいー！けっこ長いので暇な時にどうぞー！

第七話 ニシュマル国、マシユマロシティ！ピナとの出会い

ミウロ達はまだ寝てるので、一足早く、西の大陸をのぞいてみよう。

三匹がまず初めに訪れる予定の、ニシュマロ国のマシユマロシティ。
マシユマロシティは、

マシユマロが、大人気の都市。というか、ニシュマル国の最高判断者（王様みたいな人）

が好きだから流行らせたのかも知れんが。

今回はそんなちょっと変わった都市でのストーリーです。

では、本編へ！

のんびりとしているようで、都市らしい都市。それがマシユマロシティ。

暖かい春風が吹く朝、白色で統一された家並みを眺めながら、ピンク色で耳の上が黒いポケモン、ピッピの少女ピナは、お寝坊さんの幼なじみ、ゴンベのベンケイの家に向かっていた。

（何か、胸騒ぎがするだわさ）

ピナは一軒の屋根が青で思いっきり目立つ家、ベンケイの家の前で足をとめる。そして、チャイムをいつもの様にものすごい速さで押しまくる。

ピンポン ピンポン ピンポン ピンポン ピンポン
ピンポン ピンポン

百回ぐらい押すと手を止め、大きく伸びをした。

「ふー。すっきりしたわさ。」

ピナはこのチャイム連打にはまり、いつの間にか日課になっていた。
ん？この家のひと達が、迷惑しな

いかって？

それは、だいじょうぶだ。このゴンベ、ベンケイ一家は、みんな起きるのが遅く、だれか

が起こしに行かないといけないから。だから、こうしてピナがチャイム連打で起こしに来ている。

ガチャ

やっとドアがあき、ベンケイのママが暗い顔で、でてきた。

「おはようございまーす！ベンケイ、起きてますか？。」

「ごめんね。ピナちゃん。ベンケイが……。」

ベンケイのママさんはそう言うと、泣きくずれてしまった。

「ベンケイがどうかしたんですか？。」

ベンケイのママさんは大きな緑色の体を起こすと、手招きをして家の中に入る。

ピナもその後について行った

ベンケイは自分の部屋のベットに寝ていた。ピナは寝ているベンケイにすぐさま駆け寄る。ベンケイは見るからにきつそうにしていた。

「ベンケイ、どうしたただわさ？」

ベンケイは少しだまると、ゆっくりと話し出した。

「……からだが動かなくなる、病気になったんだ……。お医者さんもうやった直

せばいいか分からないらしいゴワスよ。だから、このままだと・・・

「あのね！体が動かなくなつて、お医者さんもお分らない病気になつたからって、そんな

に弱気になってどうするだわさ?! そうしてたってしかたないだわさ!

絶対、読者も（いるのか？）いきなり出てきたキャラが病気になっ
ていて、??てなってる

るだわさ！どうすんの、作者！」「どうすんのって・・・」

ピナはベンケイに一喝入ると（最後はちがうし）ふうー、と息をつく。

ベンケイは目をそらす、ピナは（ああ、言い過ぎたかな・・・）と反省した。でも、

すぐにベンケイはピナを見ると、

「伝説のマシユマロ、あんみつマシユマロを作ってくれでゴワス！」

「話がつながってないだわさ・・・。でも、あたしが作ってやってもいいだわさ。」

「本当にゴワスか？！」

ベンケイは嬉しそうにしている。ピナはコクリと自信げにうなずいた。

ペルポシップは、ニシユマロシティの船乗り場に着いていた。船から、ミウロ達が出て

くる。三びきはタロウ船長のほうを、振り向いた。

「ありがとございました。色々お世話になりました。タロウ船長。」

「

エルはそう言って、ペコリと頭を下げる。ミウロとユーも、

「ありがとうございます。」

と頭を下げる。

「いやいや。こちらこそ、君達に助けてもらって。

西の大陸は、悪の帝国の影響力が強い方だから、気をつけて行くんだよ。」

タロウ船長は、「がんばってね。」と言い残すと船の中に戻る。

「はい！」

ミウロは元気よく言うと、タロウ船長の乗ったペルポシップは、動き出し、やがて地平線のかなたに消えて行く。

「さて、ここはどこでしょう？」

ペルポシップを見送り、出口へ歩いていると、ユーがニひきにクイズみたいに聞いた。

「そりゃあ、決まってんじゃない。西の大陸だろ！」

ミウロが元気よく答える。ユーは首を横に振る。

「ざんねーん。ミウロ、あっているんだけど、どこの国かって事なのよ。」

「そうだったんなら、早く言え。」

「おいら、ここ、どこだか知ってるよ。えーと「ニシュマロ国」のマシュマロシティ。」

エルがミウロとユーの後ろで答えた。

「せいかーい！お見事、エルー」

と言いながらユーが後ろに振り向くと、エルはなんと、地図を見ながら答えていたのだ。

「地図かー。そのてがあつたなー。」

ミウロは、残念そうに言う。ユーは顔をグイッとエルに近づけた。

「エル、その地図、誰からもらったのよ？」

「ト、トトから、出発すんぜんにもらったんだ。」

エルはまるめた地図を振りながら、一歩ずつ後ろに下がる。ユーは一歩ずつ前に進む。

ミウロはどうしようかと、ニひきの様子をみていたのだが、もう船乗り場の出口だったので、先に行っ

てエル、ユーを呼ぶことにした。怪しいフィンキがただよっていたからだ。

「エル、ユー。もう出口だから早く来いよー。」

「うん！。待ってよー。」

「待てー。その地図をよこしなさい。」

エルが、慌てて出口にすっ飛ぶ。そのあとをユーがすごいスピードで追いかけた。

エルが一番にミウロの所に着く。

「ミウロ、ナイス！」

エルはミウロのリュックの中に急いで地図を入れる。そして、ユーが最後に出口に来た。

「あれ、地図は？」

「そんな事より、早く行こうよ。」

ミウロがユーの背中を押し、エルが前を走った。その時！

ドンッ

エルとピッピがぶつかってしまった。そのピッピはピナで、家に帰る途中だったのだ。

「いテテテ。」「いったああ。」

エルとピナは頭を打ったのか、そこをさすっている。

「だいじょうぶ?。」

ミウロとユーは、心配そうにニひきをおこしてあげる。

「うん。もう大丈夫だわさ! ありがとだわさ。」

「はやっ。もう良くなったんだ。」

ユーが目を大きく開いて驚く、エルは、うずくまりながら、

「きつと君、石頭だよ。どおりでかなり痛かったわけだ。」

とつぶやく。すると、ピナがエルに近ずき手を差し伸べた。

「ごめんね。おいらのせいで。えーと・・・」

「ピナだわさ。その事は気にしないでいいよ。もう良くなったただわさ。」

「ありがとっ。」

エルはピナの手を借り、頭をさすりながら立ち上がった。ピナはミウロ達の名前を聞く。

「おいらは、エル。右となりから、ミウロ、ユー。」

ミウロは、「よろしく」とありきたりな言葉を言い、ユーはヤッホーと手を振る。

「うん。よろしくだわさ。」

そして、ミウロ達は、ピナの秘密基地に案内してもらった。になった。

秘密基地……

「ここが、ピナの秘密基地なのかあ。」

ミウロは、ピナの秘密基地を上からのぞく。

秘密基地は、町はずれにある原っぱのマンホールの中だった。マンホールの中は真っ暗で

何も見えない。

ピナが懐中電灯を持ちながら器用にハシゴを降りる。

「ほら、降りるだわさ。」

ミウロ、エル、ユーもさっさとハシゴを降りた。ピナがどこかのボタンを押すと、

パツと基地が明るくなる。

「へえー。なんか本格的ね。」

明るくなった基地の様子は、ベットやテーブル、どうやって運んだのかソファやテレビ

までおいてあり、もう秘密基地というより、ちゃんとした部屋のようだった。

「ささ、ここに座って。」

すすめられるままにミウロ達はピンクの可愛らしいソファに座る。

「でさ、ピナ。どうして僕達をここにつれてきたんだい？」

ミウロが聞く。ピナは真剣な顔つきになった。

「初対面で、ずうずうしいかもだけど、お願いがあるだわさ！伝説のマシユマロレシピを

探すのを手伝ってほしいだわさ！！」

「えーと……。」

いきなりすぎて、ニびきは言葉がつまる。

ミウロがこんな事が前にもあったような気がしたと思っていると、エルがいさぎよく

立ち上がる。

「いいよ！ね、ミウロ、ユー。」（エルが主人公みたいだ）

ミウロは「当然！」と大きくうなずく、ユーはめんどくさそうに「はいはい」と言う。

「ありがとだわさ。」

ピナはエルの手を握るとその手を振った。

「えへへ。」

エルが照れているのを見ながらユーはミウロに話しかける。

「エルって、ホント優しいわよねー。」

「うん。エルってそういう所がいいよな。誰かさんとは大違いで。」

ミウロはあきれ顔で、ユーを見る。

「なによ！失礼ね！うちだって優しいところくらいあるわよ！」

「まあまあ。」

ミウロがユーを抑えてるとピナがこちらを向く。

「ミウロ達もありがとだわさ。」

「へへ。お安いご用だよ。」

ミウロが言った。

それから、四ひきは、マシユマロの遊具ばかり置いてある変な公園にいた。

「で、その伝説のマシユマロレシピがどうしているんだ。」

ミウロがマシユマロ型のベンチに乗る。

「実は・・・、友達が原因不明の病気になってしまっていてそれで、そのマシユマロを作ってきてほしいって頼まれたからだわさ。」

「そうなんだ。大変だね。」

ミウロとエルが同情しているのだが、ユーは詰まんなさそうにマシユマロの遊具をみる。

ピナはユーのノリ気なさにきずいたかミウロに囁く。

「あの子、やる気あるんかだわさ。」

「さあ、気分しだいじゃないか？」

ミウロも今は寝ているユーを見ながら答えた。と、その時、突然ミウロの脳裏に、何かが

イメージ図のようなものが浮かんできた。

「ちょっと待って。」

ミウロは目をつぶり、そのイメージに集中する。

「ミウロ?どうした。」

エルが心配そうに言う。ピナはエルの肩を軽く叩くと、シーと人差し指を口にあてた。

集中していると、ぼんやりとしていたイメージ図がだんだんと空の様で海の様

な感じの空に見えてくる。それが、ハッキリと分かるようになってどこかで聞いた

「声」が聞こえてきた。

【伝説のマシユマロレシピは、この「空の海」に住むチルリタスのもとにある。空の海は、

マシユマロシティのロフロ海、東の海岸に入口があるぞ。

健闘を祈る。】

最後の声が響く。そして、イメージ図はゆらゆらと消えていった。

「やった！伝説のレシピのありがが分かったぞ！」

ミウロは、うれしそうにピナ達にさっそくありかを伝えた。

ロフロ海、東の海岸までは三十分でついた。東の海岸はまったく人 ポケモン がおらず空の海に行くのに丁度いい。

「一応、着きましたけどだわさ、ここからどうやって行くだわさ。」

ピナがキョロキョロとあたりを見回す、海岸は石ばかりあって特に目立つ物はなかった。

「んーと。こつちよ。」

と言ったのは、ミウロでも、エルでもなくユーだった。ユーはてくてくともつと東の方向

へと進む。その後ろをピナ達が着いていく。

「ここー！」

ユーが突然止まる。でも、やっぱり特に入口らしいのはなく相変わらず石がごろごろと

転がっているだけだ。

「何もないけど。」

エルが言う。ユーは得意げに、

「まあ、見てなさいよ。」

とバックからキラキラと青く不思議な色を放つしずくのネックレスを取りだす。

そして、海のほうを向くとそれを海に投げ捨てたのだ。

「何をしているだわさ?!」

ピナがユーに言う。

「だいじょーぶ。この優しいユー様が空の海に連れて行ってあげる。」

「………。やさしい?」

ユーは偉そうな態度になると、『ソーラービーム』をネックレスを投げたあたりに突っ込む。

バッシャアアン!

とてつもなく大きな水しぶきがなぜかミウロ達の目の前で上がった。

「うわああ。」

エルがあわてて逃げる。水がかぶさってくると思ったからだ。ミウロは余裕そうに

「すげー。」

と感動する。

ピナはじつと水しぶきをみていた。

「それ!」

ユーが片手をあげると、水しぶきは竜巻のようになる。それは五秒ぐ

らい形を保っている

と、だんだんと水の竜巻は階段になっていく。

ユーは両手をあげるとそれをクロスした。それと同時に竜巻は完全に静まり、あたりは

静かになった。

「す、すごいだわさ。ユー、えっと、ありがとう。」

ピナは半分驚き、半分照れた感じだ。

「いいのよ。別に。」

なんとなくそっけない返しをユーは言う。

（ユーにもいい所あるじゃん。）

その時、ミウロは少しユーの事を見直していたのだった。

それから、ミウロを真ん中にみんなは上にと続く水の階段を見上げ、ミウロの、

「行くぞ！」

の合図で、四ひきはミウロを先頭にして、階段を駆けあがっていったのだった。

続く！

第八話 空の海の大冒険！（前書き）

すみません、これもかなり長いのでひまな時にどうぞ！

第八話 空の海の大冒険！

長い、長い階段をやっとこさ登り終える。

「フー。疲れたあ。もう一步も動けねえ。」

ミウロはひさびさに倒れる。前に疲れて倒れた時はいつだったろうか。

「?!?!なんだこりゃ！」

倒れた感触は、ふわふわしてて、羽毛布団みたいだった。

「それ、雲よ。というかどう見たって雲じゃん。」

気がつくとユーがミウロを上からのぞきこんでいた。

「ミウロ！ユー！みてよ、凄いよ！！」

エルのはしゃいだ声がする、ミウロはしぶしぶ起き上る。

目の前の風景を見たたん疲れは、ぶっ飛んだ。

「わああ。」

イメージで、いちおう眺めていたのだが実際に見ると、凄い。

ここは、雲の上で青いのは空、だとは思っただが海の様にも見えてそれがいろんな色に

輝いているのだからつい見惚れてしまっ。

「何、ぼーとしてんの。これからが本番よ。」

ばしっ

ユーはエルの頭をかばんで殴った。エルはこれで被害が二回目になる。(すまんなあ、エル)

「痛いじゃん。ユー。」

よっぽど痛かったか涙目だ。でも、ユーはお構いなく

「あんたがボーとしているから、ぶたれたのよ。」

と冷たい言葉をはく。ミウロは、ユーの態度にイラッとくる。

「おい！ユー！自分がやっというてそれはないだろ！」

「そうだわさ！いくら何でも酷いだわさ！！」

ピナも参戦し、二ひきはユーを囲む。

「何？！うちが連れてきてあげただけど！もう、あんた達なんて大っ嫌い！！！」

ユーはふん！と逆切れして、前にある雲を飛び石のように軽くジャンプすると走り出す。

でも、ユーの行き先は、とんでもない所だった。それは後の話になる。

「なんだよ。怒ることないだろ、まったく。」

ミウロは、謝らずに怒ってどこかに行ってしまったユーに腹が立っている。

「ミウロ、そんなに怒んなくてもいいよ。君たちも言い方とか考えていえば良か

ったんじゃないかな??」

と、エル。

「でも! あっちだって、悪いだわさ。」

「確かにそうかもしれないけど、言葉使いは僕達だって気をつけるべきだった。」

「そうそう!! みんな仲良く! くバナナの王様くバナナの王様あ
くく」

と、エルがノリ良く踊る。ミウロとピナはエルの突然のキャラ変わりにポカーンと見ている。エルはハッと我に返った。

「オイラ今、何を?!」

「おぼえてないだわさ?。」

「うん。ぜんぜん。」

エルはキョトンとしていた。

「なんだったんだろ、さっきの・・・。」

ミウロは少し怖くなってきた。でもそれを振り切り、

「それはさ、置いていて、伝説のマシユマロレシピをチルリタスにもらいに行こうよ。」

と、きりだした。

「ユーは、どうする?」

エルが言う。ピナはその時、また何か嫌な感じに襲われる。

（また、胸騒ぎがするだわさ。!、もしかして、ユーが危ない!?）

「ピナ、だいじょうぶか?」

ピナの顔色が悪いことにきずいたミウロが声をかける。ピナは慌てる。

「あたしは大丈夫だわさ!でも、ユーが危ないから早く後をつけるだわさ!」

「ユーが。早く行こう!」

エルとミウロとピナは、急いでユーが行った方の雲に飛び移り、（

ピナはなんとか)

真っすぐ走り出した。

雲の道は限りなく続いていて、あまり走り続けると体力がなくなるから歩くことになった。

た。

ミウロは、もうクタクタで雲に倒れ込む。

「疲れた。ここで、ちょっと休憩しようよ。」

「うん。オイラも賛成。」

エルも疲れたのかそう言う座る。

しかしピナは、

「だめだわさあー！休憩は後！早くしないとユーが危ないだわさ
-！。」

と、疲れて倒れているミウロをひっぱる。と！その勢いで

ミウロはピナの凄い力で、遠くへ吹っ飛んでしまった。

「うわああああああ。」

ミウロはキラんと星になる。

「あ、ごめーんだわさ。」

「ピナ、すご・・・。」

エルはミウロが飛ばされた方向をじつと見ながら絶句している。飛ばされた方向はまだ見

知らぬ所、今から進む方向だった。

「まあ。いいんじゃない？これで、エルも休憩なんてするひまないだわさ。」

さ、急ごうだわさ!!。」

「わあああああ!!!!落ちるー!!。」

その頃、ミウロは手足をばたばたさせて絶叫中。

ぼすっ

そして、頭から雲に突っ込んだ。ミウロは頭を雲から抜く。

「ぶはあ。ピナ、どこまで飛ばしたんだよ。でも、まさかこんな遠くに飛ばされるとは・・・。」

周りは相変わらずきれいな海の様な空だ。

ミウロはユーと会えるかもしれないと思いつつ先へ歩こうとしたその時！

「きゃあああああ!!」

ユーの声がしたのだ!

「!、ユー!!」

ミウロは声のした方に急いで行った。案外早くたどりつく。

しかし、一歩先は、氷の雨が滝よりもすごい速さでふっていた。音もザアアと物凄い大き

くてうるさいほどだ。

「くそ、これじゃあ通れないじゃんか。・・・でも、ユーがこの中に!」

ミウロはためらいを捨て、思い切って氷の雨の中に入った!

氷が体全体に当たって血が出るかと思ったほど痛く、周りが氷ばっかりのせいでよく見

えない。

「くっそお。」

でも、がんばって一歩ずつ、一歩ずつ進んでいくと、緑色の何かが見えた。

氷のせいで形はあまり分からないがきつとユーだ!

「ユー！！！！。」

だんだん緑色のものはシェイミ、ユーに見えてきた。そして、あともうちょっとで

たどり着ける所だったその時！！

大きな氷の塊が、ユーの真上に落ちてきていた！！

「ユー！！あぶない！！。」

ミウロはもう氷なんて気にならなかった。

自分でも驚くほどの速さで走り、ユーを抱きかかえ塊が落ちてくる寸前の所で

よけた！！

ゴロゴロゴロ、ミウロはユーを抱えたまま、転がりながら氷の雨を出す。

「ふ、ふう。良かったあ、死ぬかと、思った。」

ミウロは息を切らしながら気絶しているユーを雲の上に寝かせてあげる。その直後、

「何、どうなったの？」

ユーが起き上った。

「あ、ユー！大丈夫か？！」

ミウロはそこで気がつく、まだケンカ中だったのだ。ユーは、ミウロを睨む。

「何よ、助けられなくてもよかったのに。だいたいうちはここに何度か来てるから

別に平気だったの！！」

ふん！と顔をそむける。

ミウロはまたイラツとくる。

「助けてやったのにお礼もなしかよ。お前、あともうちょっと死ぬ所だったんだぞ！」

「お礼くらい言う。・・・ありがとう。」

「お、おう。」

突然のユーの意外な反応だ。ミウロもその反応に怒りも消える。

（そっか、いつまでもケンカしてちゃ気分悪いもんな。）

「あのさ。ユー、ごめん。」

「は？何で誤ってんの。」

「いや、僕も言い方を気をつければ良かったんだよな。」

「そうよ。でも、うちもごめんね。」

「うん。」

.....

少しの間、沈黙する。

「ユー、ピナたちはここを通れるのか？」

ユーはニンマリと笑いながら自分のバックを指差す。

「うちにいい考えがあるわ、このバックおろしてよ。」

「うん。、、よし、いいよ。」

ミウロはバックをおろす、ユーはごそごそと何かを探しはじめた

そして、

「あつた！これこれ、はい。ミウロ、これ使ってみなさいよ。」

そう言つて渡されたのは双眼鏡だった。

早速のぞいてみると、なんと遠くにいるはずのピナとエルの姿がみえたのだ。

ニひきはどうやら氷の雨の前のようにだ、困った顔をして立ち止って

いた。

「どう、すごいでしょ。これはね、たとえ前に建物があつたとしてもこれで見れば

向こう側がばっちり見れるのよ。」

ユーはエッヘンと得意顔になっている。

ミウロは双眼鏡を顔から離す。

「へえー。すごいなー。で、これで何か意味あるのか？」

ユーはミウロに貸していた不思議な双眼鏡を返してもらつと、エル達をみる。

そして、覗いたまま、

「エルー、ピナー、聞こえるー?。」

と言う。エルとピナはユーの声がきこえたのでびっくりしていた。

「うん。聞こえるよ。」

とエルが返事を返す。

エルの声は双眼鏡から聞こえていたので、ミウロも何を話しているのか分かった。

ユーの話は続く。

「ピナ、エル、あとミウロも良く聞いて、今から氷の雨を消すためにみんなでイッセイに

攻撃をしかけるのよ、技は何でもいいわ。狙いは、あの上に浮かんでいる雨雲。

いい？」

ユーはエルがOKサインをするのを確認すると、ミウロの方を向く。

「僕もいいよ。」

ミウロはやる気満々だ。技は『みずてつぽう』に決めた。

ついでにピナは得意の『ゆびをふる』。

エルは『じゅうまんボルト』。

ユーは『エナジーボール』をうつ。

ユーは双眼鏡をみながらカウントダウンをする。

「いくわよ。五・四・さん・にー・いち！

発射！」

「『ゆびをふる』！」「『じゅうまんボルト』」「『エナジーボール』つ。」

「いっけえ『みずてつぽう』！」

バシユッ！

みんなが同時にそれぞれの技を雨雲に打ち込む。

すると、氷の雨はだんだんと止みはじめ、雨雲もしだいに消えていった。

「おーいっ。エル！」

向こうにいるエルにミウロは手を振る。エルも笑って手を振り返す。

ピナも手を振る。

「ミウロー。ユー。ごめんだわさ〜。」

ミウロとユーは顔を合わせると、笑う。

「ピナー。その事は気にしないで！うちが悪かったのー。」

「僕も大丈夫だよー。というか早くこっちに来なよー。」

「良かっただわさ。気にしてなくて。」

ピナは手を下ろす。二人が気にしていなかったと知ってホッとしていた。

「ピナって案外、心配性なんだね。」

エルが意外と言うようなおどろき声で言った。ピナは笑う。

「あはは、そうかもだわさ。よし！早く行こうだわさ。」

ピナは先に走り出す、エルはそのあとを追いかけて、途中でピナを追い越すと一番につく。

ピナも後から来て、やっと四匹がそろった。

アルセウスはそれを暖かく、はじまりの間から見守っていた。

第九話 ユー、おそるべし……！（前書き）

えーと、むちゃくちゃ久しぶりの最新です！
よかったらよってってください！！

第九話 ユー、おそるべし……！

ミウロ達、四匹はエルがいつの間にかタロウ船長にもらっていた弁当を食べていた。

中身は、全部パンだ。

「エル、お前さあの時、キャラ崩壊してたよな。」

ミウロが笑いをこらえて言った。それに続いてピナも笑いながら言う。

「そうそう、バナナのおうさま」って歌ってただわさ。」

エルは二ひきが余計な事を言うので、顔を真っ赤にしている。

「なんだよー。あれはオイラの意識でやったんじゃないからね。」

ユーは、興味しんしんでミウロに聞く。

「どうだった？おもしろかったの？」

「あの時はおもしろいっていうよりびっくりしたよ。でも、今思い出すと……。」

ミウロは笑いをこらえるのに必死で、パンを早食いする。

「ふーん、おもしろそうね。」

ユーの目がキラんと光る。

この次、だいたいどうなるかエルとミウロには分かっていた。

「おい、ここは逃げた方がいいんじゃないのか？」

ミウロがエルに早口で言う。エルはコクンとうなずき、急いで逃げる。

「?どうして逃げてるだわさ？」

ピナがキョトンとしているので、ミウロが説明してあげた。

「・・・ってことなんだ。」

ミウロが説明し終わると、双眼鏡をのぞいていたユーはエルを追いかけて行った！

と、思ったらなんとミウロの方に近ずいてきた。

「あんた、バナナのおうさまーってやってみなさいよ。」

「えー。どうして僕なんだよ。エルがやってたんだぞ。」

ユーは「へー」と笑う。

「あーあ、おいしいわねー。百円あげようと思ったんだけど、やっぱりやめようかなー。」

とくるりと後ろを向く。ピナはミウロの横で、

「あはは、百円で誰がのるとおもうだわさ?。」

とまさかーみたいなことを言っていると、

「よし!のつた!」

ミウロが目をキラキラと輝かせながらガッツポーズ。

「えええー!」

ピナがストンキョウな声を上げた。ユーは密かにニヤツッと笑う。

「じゃあ、いくぞー!せーつの、(ピーー、以下しょうりゃくです。)

「あはははは、あーおもしろかったあ。」

「エルがやった時より面白いだわさー。」

ユーとピナは大爆笑である。ミウロは苦笑していた。

「あはは。笑ってたら、おなががすごおおくすいちゃったあ。」

と、ユー。

「ねえねえ!ミウロの、ヒレちょうだい!」

と、また目をキラんとさせる。

『は・・・い??.』

残りの3匹が言った。いつの間にかエルも戻ってきている。

「いいから!ミウロ!こっちに来なさい!」

「ええ~~~~・・・」

と、ミウロが言つのも関わらずに・・・

ミウロのヒレを・・・・・・

バクツ!!

凄い音がひびいた。

「ああ~~~~^^うまいうまい」

と、ユー。

3分たつても噛み続けている。

「いたい~~~~!いたいよお!ユー!~!」

「チルリタスのあじがするうう!~!」

ユーが、完ぺきに、こわれている(笑)

これは、どうしよう・・・・・・と、3人は同じことを考えていた。

「ひとまず……チルリタスの所に、つれてってもらおう。」

ミウロはそうつぶやくとグイツとユーを引き離そうとする。のだが、完全にこわれている

のか全く離れようとはしない。

「エルーピナも手伝ってくれよー。」

ついに三人がかりでユーを離すことになった。エルがミウロの体をひっぱり、ピナがユー

の体をひっぱった。

「きゃあー！」

ユーがピナの凄い力にびっくりしてヒメイをあげる。と同時にミウロのヒレからも離れ

た。ミウロは後ろに倒れ、ヒレを押さえる。

「あー、痛かったー。ありがとうエル、ピナ。」

「どういたしまして。それより良かったね、ヒレ噛まれた後がついてるだけで血は出てないもん。」

「

そうか?!よかったー。血が出てるかとおもったー。」

ミウロは本当に嬉しそうにしていた。

「おーいつ。その二人ー！早く来ないとおいてくわよー。」

いつの間にか先に行っていたユーの元気な声が聞こえた。

「はい。今行くー。」

ミウロも負けじと元気に言い、二ひきはピナとユーの所へ行く。

「ユー、お前ここに何度か来たことあるってな。」

追いついて歩きながらミウロが言う。

「そうだけど？チルリタスはどこかって聞きたいんですよ。」

「うん。そうだわさ。早くチルリタスの所に案内してだわさ。」

そう言ったのはピナ。友達のベンケイを思い出してあせっているようだった。

「そう急がないの。安心してもうすぐそこだから、あーほら、あれー！」

ユーが指差したのは、雲でできた宮殿だった。

「あれがマシユマロ宮殿、あそこにチルリタスが住んでいるのよ。」

「へえー。じゃあお先に行ってください。」

ピナが宮殿の方に駆けだす。「僕も！」とミウロも、ピナに続きエルとユーもついていく。

宮殿は近づくたびに大きくなっていく。

そして宮殿の前にミウロとピナが先につき遅れてユーとエルが来た。

「これが、チルリタスの宮殿かあ。」

エルは関心している。

宮殿は思ったよりもコジンマリしていた。かべは白く、大きな柱が何本も立っていて、

一言でいえば、ギリシャの神殿に似ていた。

「中に入ろう。」

ミウロが言い、一行は宮殿の中へはいる。

「あー、何にも変わってない。なんだか懐かしいなー。」

とユーが高い天井を見上げる。天井にはマシユマロの絵が描いていた。

「懐かしいって前に来たのはいつだわさ？」

「四歳くらいの時ね、パパといつも来てたのよ。」

「えええー！」

とミウロが叫ぶ。

「行きたびに大変だっただろう。」

「まあ、そうね。」

「「？」」

ピナとエルはどこらへんが大変なのか分からず、？マークだ。

そんな感じで進んでいくと、立派な押し扉の前にきた。その扉にもやっぱリマシユマロ

のモチーフがついている。

「せーのっ。」

エルとミウロとピナが手すりを押したり引いたりして、開けようとするが扉はびくとも

しない。

「あんた達ばかりこうすればいいのよ。」

ユーはおかしいのか笑いながら扉を横に引く。

しかし、開かなかった。

「ブ、すかぶってやんのー。」

ミウロとピナが吹いて笑う。

「んあー！ー！こんな扉！えいつ『シードフレア』！」

ユーはやけになって『シードフレア』を扉にぶち当てる！

ドッカーンッ

すごい爆発音が宮殿にコダマして煙がただよう。

パラパラ・・・

煙がはれると扉のど真ん中にトンネルのような穴がポツカリと開いていた。

「いいの？！いいの？！壊しても！」

エルが目を大きく開いて言う。

「仕方ないのよ。だってビクともしなかったんだし。」

（いいのかよ！というか僕が主人公なのになんか目だってない・・・

。

ミウロはユーに主役をのつとられそうな気がしてきて少し不安になる。

おそろべし・・・ユー。

三びきは、ユーの態度にものすごい衝撃をおぼえていた。

次回からはミウロが活躍します！

ミウロ、気にすんな！

さようなら、マシユマロシティ！（前書き）

久々すぎる最新ですねー

さようなら、マシユマロシティ！

ミウロ達、四匹はユーが派手に壊して作ったトンネルをぐぐり、部屋にはいる。

しかし誰もおらず、棚は倒れていて大理石の机もひっくり返っている。カーテンもボロボロだった。

「どうしたのかな、チルリタスさん。」

とエルが言う。

その時、ミウロの脳裏にまたイメージのようなものが浮かんだ。

（まただ。よし、集中してみよう）

ミウロはそのイメージに心を傾けるとボヤーとしていたイメージは雲のようなふわふわの綿みたいなのから水色の首が出ているポケモンが静かに読書している

様子が見えてきた。

そのポケモンは今ミウロたちがいる部屋（でも、まだ荒れる前）で読書していたので、

チルリタスだとミウロは確信する。

チルリタスが優雅に椅子に座って読書しているかと思いきやイメージの中で突然パリーンと窓が割れた音がした。

（だれだ？）

ミウロはその音がした方をイメージの中で見ると、

なんとザンがいた！。ザンの隣から仲間だろうか、紫色のスライムみたいなポケモン、メタモンがひょいっと窓から部屋に入ってきた。

（ザン！あいつの仕業だったんだ）

チルリタスとザンは会ったそうそうもめている。

でも、なんて言っているのかミウロには分からなかった。

ザンゲースは怒って『インファイト』でチルリタスに攻撃をする！

チルリタスはもろに当たり、よろけてテーブルと一緒に倒れてしまった。

（チルリタス！）

ザンは攻撃を続け、『ブレイククロー』を出す。

チルリタスはギリギリでよける。ザンはカーテンを引き裂いてしまった。

チルリタスは反撃しようと、『りゅうのいぶき』を出しかけたそ

の時！

ユキメノコに変身したメタモンに後ろを回り込まれて、『れいとう
ビーム』がチルリタスの

首にあたった。

チルリタスは倒れる。

そして、ザングースとメタモンに連れて行かれた。

（ザンめ！あんな事してなにが意味があるのか！）

ミウロが怒りを覚えていると、空き部屋になっているイメージはだ
んだんとかすんでいき

やがて、消えた。

「・・・ウロ、ミウロ、ミウロ！」

そして、暗闇の中でエルの声がした。

「！」

ミウロは目を開ける。エル、ピナ、ユーがミウロを囲んでいた。

「ごめん、ちょっとイメージを見ていたんだ。」

「イメージ？だわさ？」

ピナが首をかしげる。

「うん。突然チルリタスが本を読んでいる場面が浮かんできたから、集中してみていたんだ。」

そして、ミウロはその後の事を身ぶり手ぶりで教えた。

「ザンって奴、ホントひどいよ！」

話を聞き終わったエルは怒っていた。

その隣でピナは謎解きしているような真剣な顔つきになっている。

「あれ？ピナ、めずらしいな、考えごと？」

ミウロが聞く。

ピナは顔をしかめた。

「チルリタス、もしかしたら奴隷にされたかもしれないだわさ。」

「どうしてよ？」

ユーが聞くが、そのあとすぐ自分で「ああ、そっか！」と聞かずにきずく。

「あのチルリタスを人質にして、この国を乗っ取るつもりなんだだわさ。」

「チルリタスは、このニシユマル国をつくったポケモンなのよ。」

ピナの説明の後、ユーが付け足した。

ミウロは心がなぜがざわつく。

（ニシユマル国を乗っ取る？でも、だれが？もしかして、ザン？それともザンを操って

いるヤツなのか。いや、レンア国の王？ということとは、ザンはレンア国から来ていたのか？）

とミウロはグルグルと考えが渦巻く。

「とりあえずさ、あんみつマシユマロのレシピを探そうよ。」

エルが話を切り替える。

「そうね。この事は後からかんがえよう。」

ユーの表情も明るくなり、ピナも「そうだわさ！さがそーう！」と張り切る。

ミウロも五秒後には「ま、いいや」となっていた。

がたがたがた・・・ドスン！

ピナがさすがのかいりきで棚をたてる。

（ピナ、使えるわね。）

ユーはニヤニヤ笑いながらその様子を見ていた。

「ユー、また何か怪しい事考えてたよね。」

エルが棚の所に行きながらユーに声をかけた。

「うん。ちょっとねー。」

ユーはなんだかご機嫌そうだ。

「あつたー！あつただわさ！伝説のあんみつマシユマロレシピとあんみつ！」

ピナの嬉しそうな大声が響いた。

「え！本当？！」（ミウロ）

みんなはピナの周りに集まる。

「これが、伝説のあんみつレシピ・・・。」

エルがまじまじとそのレシピを見つめる。

「といっても、フツのレシピだわさ。」

あはは、とエルは手を頭の後ろにやって照れたように笑った。

レシピは置いていて、三びきはあるみつの方に目がいく。

「このあんみつ、絶対ただものじゃないわね。」

と、ユー。

それはそうだ。なんせ、このあんみつは黒いのは黒いのだが、金色の不思議な蜜のようなものが混ざっていて、何とも言えない美しさなのだ。

「蜜が美しいっていいすぎだわさ。」

ピナが作者に言う。でも作者は無視した。（おい！）

「じゃ、レシピもあるみつも見つかった事だし、帰ろう！」

ミウロが言う。

「そうだわさ！早くベンケイに作ってあげなきゃ！」

ピナがレシピとあんみつを片手に走り出した。

「ピナ、そんなに急がなくても大丈夫よ。うちが秘密基地までワープさせてやるから。」

ユーがピナを引きとめると、バックから、三つの棒を取り出す。
「ミウロ」。この棒の形にさしてよ。」

ユーがミウロの背丈と同じくらいの棒を二本わたす。

「うん。分かった」

ミウロは自分達の周りにの形になるように棒を一本ずつ差した。
床は雲だったから、

簡単にさせた。

「ごくろっ、ミウロ。じゃあ、「ピナの秘密基地」にワープ！」

ユーがそういうと、ミウロ達を囲んでいる棒は三角型のバリアーの
ようになり、

シュパッ

とすばやい音を立て、消えた。

気がつくと、四匹はピナの秘密基地の中にいた。

ミウロは基地に着くや、ソファァーに倒れ込む。

「はあー疲れた。」

「まだ終わってないでしょ、ミウロ。早く立ちなさいよ。」

ユーがミウロを叩く。

「ちょっと休憩させてよー。」

「あともうちょっとだから頑張ろう、ミウロ。」

と、エルも言う。

「エルが言うならしかたない、やるか！」

ミウロはソファーから飛び起きた。

ピナはキッチンの所で、レシピの確認と材料の確認をする。

「よし、材料は全部あるだわさ！」

「あんみつマシュマロ、さっそく作るわよ！」

ピナとユーはやる気満々だ。

「オイラは何をすればいい？」

エルがピナに聞いた。その横でミウロがあくびをする。

「エルは、この粉末タイプのゼラチンを水にとかしてほしいだわさ。」

ピナはボールとゼラチンが入っている袋をエルに渡す。

「よし、やるぞー。」

エルはなんだか楽しそうだが、レシピを見るとボールに水を入れテールに置く。

そして、ゼラチンを入れようとしたその時！

「あつ！」

どばあー、ゼラチンが音を立てながら大量にボールの中へ。

「あーあ。こうなったら水を入れるしかないわね。そのボール貸しなさい、エル。」

ユーがあきれ顔で、大量に入ってしまったゼラチンを眺める。

「ごめんね。」

エルが謝りながらボールを渡した。

ユーはボールに水を入れていると、ピナが慌てて寄ってきた。

「ユー！！水入れたらだめだわさー！」

ピナが蛇口を閉める。

「どうしてよ？」

ユーは少し不機嫌そうに顔をしかめる。

「ゼラチンの中に水を入れるとすぐ固まってしまっただメになるからだわさ！」

「ちえ、それなら仕方ないわね。ミウロ！あんた、これやり直しなさい。」

その頃、ミウロは暇だったのでソファーに寝てしまっていた。

でも、ユーが呼ぶ声を聞いたとたん飛び起きていた。

（危ないところだった。あともう少しで被害にあっているとこだったよ。）

「で、なに？」

ミウロはヤレヤレと、作業している三びきの所に来ると、エルが渡されたものと同じ物をユーから渡された。

「ボールに水いれて、そんでゼラチン入れて溶かしてね。」

ユーはニコと笑う、ミウロは気分を切り替え

「オッケー！」

と言うとさっそく作業に取り掛かった。

・
そして、エルのドジが伝説並みに連発しながらも、一時間後・

ようやくあんみつマシユマロができあがり、ラッピングもすんでいて、緑の袋にマシユマ

ロは入れられていた。

ピンポーン

ミウロがベンケイの家のチャイムを押す、するとベンケイのお母さんが出てくる。

「こんにちは、ベンケイに会いに来ただわさ。」

ピナが緑色の袋を掲げる。

ベンケイのお母さんはニッコリと笑って「どうぞ。」と中へ案内してくれた。

ガチャ

そして、ベンケイの部屋のドアが開く。ピナ、その後ろから、ミウロ、エルが顔をのぞかせる。

「ピナ！」

ベンケイはニッコリと笑って嬉しそうだ。

「あんみつマシュマロ、作ってきたわさ。」

ピナが自信満々に緑の袋をかがげ、部屋に入る。ミウロ達は邪魔しちゃ悪いと部屋の外で見ている。

「あの子がベンケイか、可哀想だな。」

ミウロは体が動かせないベンケイを可哀想な目で見つめた。

「はい。ベンケイ。」

ピナがマシュマロを取り出し、ベンケイの口に運ぼうとした時！

「わあー。うまそうでごわすー！」

ベンケイはキラキラ目を輝かせながらマシュマロを手にとったのだ！。

「ベンケイが、手を動かせた！」

ピナは一気に不安が流れた。そして、ピナの頬に涙が伝う。

ベンケイのお母さんも感動のあまり泣いていた。

でも、本人のベンケイといえば病気が良くなった事なんか気にせずマシュマロをバグバグと食べ終わり、満足そうな笑顔になる。

「ああー、おいしかったでごわす。あれ、おいどん体が動くでごわすー！」

今やっと、自分の体が動くという事にベンケイはきずく。

「もう、ベンケイきずくの遅いだわさー。あはははは。」

「まったくねえ、うちの子ったら。」

ピナとベンケイのお母さんが笑う。ベンケイもそれにつられて笑った。

「なあ、僕達もうここを離れようよ。」

ミウロが笑い合っている三びきの幸せそうな様子を見ながら言った。

「うん。なんか邪魔しちゃ悪い様な気がしてきた。」

エルも言う。ユーも「そうねー。」と賛成した。

それからミウロ達はピナにはお別れを言わず、夕暮れの中、南の門から出て

マシユマロシティを後にしたのだった。

つづくー!!

第十一話 長い田んぼ道（前書き）

またまたひさしぶりのさいしんですね。ポケモンノベルの方ではナ
ーファイアは（２）になりました！
では、よかったら本編にお進み下さい。

第十一話 長い田んぼ道

ミウロ達、三びきはすっかり暗くなった道をミウロが懐中電灯で照らしながら進んでいた

周りは田んぼばかりでこれといった特徴はない。

「ユー、ニシユマル国さ本当にレンア国に乗っ取られるのか？」

しばらく黙っていたミウロが暗闇を真つすぐ見つめながら口を開く。

「その可能性は高いわね。」

とユーは静かに言った。

「どうやってかそれを食い止めなきゃね。」

ミウロの横でエルの気合いの入った声が聞こえた。

「あ、食い止める方法はどうする？」

と、エルが言ったのでミウロが「何も考えてなかったんかい」笑ってつつこんだ。

「食い止める方法はただ一つ、レンア国の王を倒す事！」

と、ユー。

「じゃあ今はどうにも出来ないんだ……。」

一刻も早く食い止めたかったのだが仕方ない。

「残念だけど、そうなるね。」

エルも悔しそうにしていた。

（でも、まだ旅は始まったばかりだ。光の国に行けば何か分かるかもしれない！）

ミウロは顔を上げる。ひそかに心に希望を抱いた。

それから、一時間後。

「この田んぼ道、どこまで続くんだあー。」

ミウロがついに我慢の限界にきて、田んぼのあぜ道に倒れた。

「ここで、休憩しようよ。ユー。」

エルもミウロに並んで座った。ユーも

「そうね。じゃあお休みー。」

と言うと草の上でグーすか寝てしまった。

二人は寝転がって星を見る。

「うわああ。スゴイ数。」

エルが驚いき声をあげた。

「うん。こんなに星があるということは、宇宙ってきつと広いだろうなあ。」

「ミウロ。なんか、すごい。」

「そうか？ありがとう。」

ふああ、ミウロは眠そうにあくびをした。

「じゃあ、お休みー。」

エルの声が聞こえるか聞こえない内にミウロは深い眠りに落ちて言った。

ピチチチチチ・・・

さわやかな風が吹く朝になった。ミウロはそっと目を開ける。

「朝かあ。」

ミウロはそうつぶやくと起き上る他の二ひきはまだ寝ていたので、ミウロはひと足早く

朝ご飯の用意をする。

メニューは昨日マシユマロシティで買ったオニギリ三個と水だ。

ミウロがコップに水をついでいると、ユーとエルが起きた。

「おはよう、ミウロ。相変わらず早いね。」

エルは自分のかばんからオニギリを出して来て配る。

「ご苦労さん。ミウロ、エル。」

何もしていないユーがオニギリを貰うと言った。

朝ごはんも食べ終わり、三びきは元気いっぱいになり下り坂の田んぼ道を走り出した。

田んぼは青々と草が茂っていてときおり風が吹くと、草がサアアと音を立てて揺れる。

「まるで草の海みたいだねー。」

エルがよそみをして、ティールシティで見た海を思い出しながら、その光景を眺めていると、

「エル！危なあああいつ。」

ミウロが叫ぶ。

「ん？わああああー！」

エルが前を向いた時はもう遅い、エルは思いっきり自分の背丈くらいの大きさの石にぶち

当たってしまった。

「っうーー。」

エルはツツツと石に当たったまま地面に倒れる。

「あちゃあー。」

ユーが顔をそむける。

「遅かったか・・・。」

ミウロは倒れたエルをおこしてやった。

「おいおい、大丈夫かよ。」

「うん。あれ、向こうに見えるの村じゃない？」

エルは幸いにどこも怪我していないようだ。

それよりも、エルはこの坂を下りた所の村が気になっているようだ。

「ホントだ！誰か住んでいるかもしれないわね。」

ユーも来て、遠くの村を坂の上から眺めて隣に座っているエルの方を向く。

「あ、そういえば大丈夫なの？ケガはない？エル。」

「ああ、なんとかね。」

エルはそう言って笑って見せた。

「ユー、お前少し優しくなったな。」

ミウロが言う。ユーは照れて

「さっさと行くわよ。」

と先に走って行ってしまふ。

「ははっ、ユー照れてるー。」

二人は笑いながらユーの後をおっていった。

第十一話 長い田んぼ道（後書き）

次回予告

ミウロ達が今走りながら向かっている村
クラリアタウン、その村に住むたった一匹のリーフィア。

ミウロ達はその子にあってー？

つづく！

第十二話　ひとりぼっち

三びきは坂を下りた所にあつた小さな村の入口にいた。ユーとエルが看板を横から見て、

真ん中にあるミウロが読み上げる。

「『ここは、クラリアタウン』だつて。」

「ふーん。それにしてもこの村、静かすぎない？」

ミウロたちは辺りを見回す。

確かに、どの家も物音ひとつしないし、カーテンがしまっていて誰か住んでいるのかも

分らない。

「本当に誰か住んでいるのか？」

「オイラ、ちょっと見てくる！」

エルは村の中に入っていく。

「うちもいくー。」「あ、まてよー。」

ユーは珍しく(?)　そう言つとエルの後をついていく。ミウロも慌てて行つた。

コンコン

「誰かいませんか　！！」

ミウロがある家の木でできたドアを叩きながら大声で叫ぶ。

しーん

「誰もいないみたいだね。」

と、エルが首をかしげる。

「ほか、あたりましょ。」

ユーはさっさと次の家へ歩き出した、と思ったらまわれ右をして、ミウロに近ずいてきた。

「どうしたんだよ、ユー。」

ミウロが声をかけるとユーの目がキラんと光った。

「罰として、うちをおぶりなさいよ。」

「何の罰だよー。」

ミウロがうんざりしていると、

「つべこべ言わない！」

ユーがむりやりミウロの背中に乗った。

「おわっ。」

ミウロは少しよろけたが、エルに支えてもらい何とか大丈夫だ。

「ミウロ、良かったらオイラが変わるよ?」

ユーはミウロの体から顔を乗り出すと、笑って言う。

「いいのよ。こいつはこういう奴なの。」

「どついうやつだよ。」

ミウロが重たそうにしていると遠くから

ドオオ　ン!

とすごい爆発音がした。

「なんだ!?!」

ミウロ達はすぐさまその音のした方向を向く。煙がもくもくと立ち昇っていた。

「いってみよう!」

ミウロが言い、三びきはその煙の上がっている南の方向にむかった。

ダダダッ

ミウロ達が慌ただしく煙のあがっている所につく。煙が上がっているのは屋根に穴が開

いている丸太小屋からだった。

「中に入るのよ！ミウロ、エル。」

ユーはそう言うと、ぴょんっとミウロから降りる。

「おまえも来いよー。」

ミウロが言う。

「無理。二人で行ってらっしゃーい。」

「ちえーー。」

ユーはきっぱりと言うと二ひきをドアまで押す。エルはミウロの手を引っ張った。

「行こうよ。ミウロ」

「しかたない！行くか！」

そして、まずエルがドアを慎重に少し開け中を覗いていると、

「エル、さっさと開ければいいじゃん。」

ミウロがドンツとドアを勢いよく押す。エルは苦笑しながら「ごめ

「ん。でも、怖くて・・・。」

と相変らずのビビリキャラだ。

改めて二ひきが煙たい小屋の中に入っていくと、突然『はっぱカッター』が煙の中から

飛び出してきた！

「うわああー！」

エルが慌てて頭を抱えてふせた、『はっぱカッター』はエルを追い越しミウロに飛んでくる！

「よっ、と。あぶなー。」

ミウロはさつと横によけるとそれは後ろの壁に当たった。ミウロは『はっぱカッター』が飛んできた煙を睨む。

「誰だよ！『はっぱカッター』なんか飛ばしてきたやつは！」

「「！」「」

ミウロはザンやあのメタモンが出くるとおもったが、煙の中から無言で現れてきたのは・・・

ミウロたちと同じ年齢くらいの幼いオスのリーフィアだった。

「なんだ！お前ら、もしかしてレンア国のやつなのか？！そうだ、オレを殺しにきたんだ

る！！」

そいつはミウロとエルをかなり警戒している感じで体制をひくくして威嚇する。

「ちがう、僕たちはレンア国の仲間じゃない！」

ミウロが言うがリーフィアは疑いの目でこちらをしばらく睨む。

.....

緊迫した空気がしばらく張り詰めた。

「うん。レンア国の奴じゃないな。お前らをしんじるぜ。」

リーフィアが笑って言う。やっと信じてくれたとミウロとエルの表情がやわらぐ。

「ありがとう。でさ、どうして煙が立ち込めてたの？」

エルが聞くとリーフィアは照れくさそうにして

「オレさ、技の練習していたんだ。この部屋で.....」

クルッと反対方向をむく、煙はもう晴れて、部屋の真ん中に的当てが真っぶたつにわれて

いる。その上の天井には穴が開いていて晴れた空が顔を覗かせていた。

「一体どんな練習をしてたんだ・・・。」

ミウロが驚いているとリーフィアは得意そうに二つに割れている的当てに走り寄った。

「オレのすっげー攻撃がここにクリーンヒットして、そしたらそれが跳ね返って、この天

井に穴を開けてしまった。ってことなんだ」

「へえー。でも、外でやった方が良かったんじゃないのか？」

ミウロが言つと、リーフィアはうつむいて何かを思い出したか悲しい顔になる。

「そりゃあ、本当は外で練習したいさ。でも・・・。」

リーフィアは一瞬ためらったが決心したのか、語りだした。

「最初に言うがオレはリーフって言うんだ。

この村で普通に生まれ、この家で育ってきた。でも、ある日とつぜん武装した兵士が村に

攻め込んできてオレの父さんと母さんをつれさったんだ。

オレはその時ぐうぜん隠れて遊んでいたから見つからなかったけど。

その日から、どんどんレンア国の兵士が来てオレ以外の住民を連れ

去って言った。オレの

友達も、親戚も、なにかも。

だからオレもいつ連れ去られるか怖くて……。

こわくて……。」

リーフは、我慢しきらずもう泣いていて無言で顔を下げた。床に涙が落ちてしみる。

「……………」

二匹はシーンとなる。

（レンア国は一体どんな国なんだ。どうして関係ない人達の人生をめちゃくちゃにしてしまうんだろう……！）

ミウロは怒りのようなでも違う不思議な気持ちになった。

「リーフ、いままでひとりで頑張ってきたんだね。すごいよ」

エルがリーフの頭をやさしくなでる。リーフはエルの言葉を聞きながらただ何回もうなずいていた。

「そうだ！リーフ、僕たちと来ない？」

ミウロが提案すると、リーフは涙を手で乱暴にぬぐう。そして顔をあげた。

「本当？！オレもいいのか？」

「うん！」

二ひきは笑顔でうなずいた。

「ありがとう！」

リーフも笑顔になり、いままで一番最高の出来事が起きた事を（ありがとう。神様）と感謝していた。

丁度その時だ。

「大変、大変、たいへん！ザンがきているのよ！」

ユーが息を切らしながら慌ただしく家に入ってきた。

「「ザンが！」」

ミウロとエルが目を大きく開いて大声で言った。

「ザンって、もしかしてレンア国の人なのか？」

リーフが聞く。ミウロは「そうだよ。」と頷いた。

「とにかく、みんなこっちに来て！」

ユーに連れられるまま、一行はリーフの家をでて村の広場へといそいで駆けて行った。

ミウロ達は何もないバトルフィールドのような広場に着く。その広場の真ん中には、ザ

ンとメタンが待ち構えていた。

「やつぱり来ていたか、ミウロ。今度こそお前をぎったぎたにしてやるぜ。なあ、メタン。」

ザンはメタンを見下ろす、メタンと呼ばれたメタモンはウニャウニャと体を動かした。

「オレの村に何しに来た！」

リーフが腰を低くして威嚇する。ミウロとエルも戦闘の構えをした。(ユーは遠くから見ているが)

ザンはへへんと鼻で笑う。

「今回はミウロを倒しにきたんだけど、実はたのまれてなあオメさんをお母ちゃんの所につれていっ

てあげる事になったんだよ。」

意外だ。ホントはザンはいいい人だったのか。

ミウロはそう思い口を開く。

「ザン、リーフを連れて行ってくれるのか。」

「何いつてるの！ミウロ。あんたばか？」

ぎゅー

「いったあー。」

ミウロは痛くて悲鳴を上げた。いつの間にかそばに来ていたユーがミウロの足をふんずける。

ている。

「相手はね、そのリーフくんって子を悪い事に使おうと連れ去ろうとしているのよ！」

ユーが小声でミウロを叱る。

「ごめんって、だから足をふんずけるのは止めてくれ。」

「しかたないわね。」ユーはまた遠くに歩いていった。

「さあ、そのチビ（リーフ）を渡してもらおうか。」

ザンがミウロたちを睨んで笑みを浮かべながら言う。ミウロとエルはリーフを守るよ

うに前に立った。

「リーフは絶対にわたさない！」

ミウロが叫んだ。

「けっ、それなら無理矢理でも連れて行ってやるーおい、ミウロー

対一で勝負しろ。ルールはオレが勝ったら村を壊しチビを連れていく、お前が勝ったら村とチビは無事だったのでいいか？」
ザンがミウロに鋭い黒くひかる爪を向ける。

「どつする？ミウロ。」

エルがミウロに聞いた。ミウロはカッコつけてエルの前に回るようにしてくる。

「ぼくは、戦う。エルは見ていてくれないか？」

エルはカッコつけたミウロがおかしかったのか少し笑うと、明るく言う。

「がんばってね。」

「うん。」

ミウロとユーは手をパンツと交わして、ミウロはフィールドの端にある白い線の囲いの

中へ入る。

（絶対負けない！）

ザンも向こう側にある白い線の中に入った。

「いまから、バトルをはじめます。」

エルが審判みたいにフィールドの横で手を上げる。そこに、ユーも来る。

「では、バトル〜スタートッ!」

ユーもエルのマネをして審判のように手を上にあげる。

ミウロとザンのバトルが幕を開けた。

続く!

第十二話 ひとりぼっち（後書き）

ひまでしたら感想でもどうですか？

第十三話 ミウロVSザン（前書き）

やっと投稿できました！めちゃくちゃ久しぶりのさいしんですね。

感想、気楽にどうぞ〜

第十三話 ミウロVSザン

ミウロとザンにはらみ合う、ばちばちと火花が散った。

そしてにや、とザンが笑った。

「なんだ？お前もしかして怖いのか？」

「怖くなんかない！こっちからいくぞ、『とっしん』！」

ミウロはダダダダーと走って、ザンに突撃した。ザンは後方へと飛ばされた。

「うぐぐ……。」

ズサアー

足でブレーキをかけ、ザンの体は止まる。

「へっ、案外つえーじゃねえか。次はこっちだ。くらえ！」

ザンは『インファイト』こっげきで、凄い速さでパンチやキックを出し、ミウロを痛みつける。

「うつつ。」

ミウロはどうする事も出来ず、しゃがみ込む。

「どつしよつ。ミウロが押されてるよ。」

エルはザンの攻撃でしゃがんでいるミウロを不安そうに見ていた。

「ふーん。でも、ミウロはその位じゃへこたれないわよ。」

ユーは余裕そうに不安そうなエルを見上げた。

「そっか、そうだね。よし、ミウローがんばれー!!」 「負けるな！」

エルは納得して、リーフと一緒にミウロを大きな声で応援した。

ミウロは押されているのだがひそかに『あまごい』をしていた。

ザンの攻撃は今だに続いているがザンも疲れたか息が荒くなっている、パンチやキックを出すスピードも遅くなっている。

（よし、今だ！）

ミウロはザンのパンチをしゃがんで避ける。

「ちっ。」

そして、ごろごろ転がりながら、ザンから距離をとった。

ザンは『インファイト』で防御が下がっている。

「あとは、雨がくれば!。」

ミウロはもう曇り空になっている空を見上げる。

「おらああ!『ブレイククロー』!!!」

突如、ザンの声が聞こえた。

ミウロがハツとして、前をみる。ザンが凄い速さで爪を赤く光らせながらこっちに向って来ていた!

ガシイイン

ザンの『ブレイククロー』はミウロに当たってしまう、ミウロは片目を瞑って攻撃に耐えていた。

(早く来てくれ、雨!)

そうミウロが思うと、

ポツン、一滴の水が降ってきた。と思うと突然ザアアと大雨になった。

「これ、もしかしてミウロの『あまごい』だよね。」

エルが嬉しそうにユーに言う。

「うん。それにしても考えたねー、ミウロ。」

ユーも心なしか嬉しそうに笑みを浮かべている。リーフも（がんばれー！）と心の中で応援していた。

「行くぞ、ザン！『みずてつぼう』！！！」

ミウロはドバ　　いつもより多い水を口から発射！

『みずてつぼう』は渦のようになり真っすぐザンに飛んでいく。

「へっ、こんなのどうって事ないぜ。」

ザンは余裕そうに『みずてつぼう』をジャンプしてよけようとする。しかし、渦は途中で

ジャンプしたザンの方に曲がったのだ。

「なに？！うがああ！」

ザンは『みずてつぼう』に飛ばされ、フィールドの外に倒れた。そして気絶する。

メタンはムクホークという頭の先が赤く、体のかい鳥ポケモンに変身すると、そそくさとザンを背中に乗せ、はるか南の方に飛んで行った。

「よっしゃあ！やったぞ！リーフ、みんな！」

ミウロはガッツポーズをして、リーフ達の所に駆け寄る。

「ありがとう！ミウロ！」

リーフはそう言いながらミウロに抱きつく。

「どういたしまして。」

ミウロも嬉しそうに言った。

そして、リーフは自分の家でみじたくをし、ミウロたちとワイワイ
昼ご飯を食べ、村を出る。

新たな仲間が加わり新たな旅へと出発するのであった。

第十四話 嵐の町と炎の川

クラリアタウンをでると、林の道がず っと続いていた。

「うつ、見るからに長そう……。」

ミウロがたじろいでいると、リーフが胸を張って言う。

「そりゃそうさ、この林の道はな大人の足でも四日はかかるんだぜ。」

「

「偉そうに言うけど、あんたここ通ったことあんの？」

といつも上から目線のユーが言った。

「オレはないけど、父さんが仕事の関係で行ってたんだ。」

「ふーん。」

そんなこんな話ながらミウロたちはかなり長い林の道を進んでいた。
った。

それから、なんと一週間後……。

四匹は林の前方に町が見えるのを見つけた。

「おお！案外早く着いたね！」

エルがにこにこしながら言う。

「いや、全然早くない！」

ミウロが、あり得なくすつとぼけているエルに素早くつつこんでいると

「そこー！早く来なさい」

ユーが呼んでいる声がする、前をみるとリーフとユーが先に町の細長い家の前に立っていた。

「ユーとリーフいつの間に……」

エルが苦笑いしながらつぶやいた。二ひきはのんびりとユーとリーフのいるとこまで歩いて行く、町

並みはけっこう特徴があり、すべての建物がビルのように高いのだ。町の中央にはひととき目立つ時

計台も建っている。

「たっか いなー。」

エルがビルのような家々を見上げながら言う。

「どうしてこんな高いんだろうなー。」

ミウロも上を見上げている。

コロコロコロ

突如、雷の音がすると、みるみる内に空が曇りはじめた。そして、雨ととてつもない凄さの風が吹いてきたのだ。

「やばいつ。速くいこつ」

ミウロとエルは他の二ひきの所へ急いで行つた。

「遅いじゃない！早く来なさいって言つたでしょ！」

リーフたちのところに着くやユーに怒られる。

「ごめんって、お詫びになにかしてあげるからさ。」

ミウロがユーのご機嫌とりにそんな事を言つ、リーフ以外はユーがまた凄い事をさせられると覚悟したが、ユーは

「別に何もしなくてもいいわ、それより宿を探すわよ。もう日が暮れるから」

なんかしらつとしていた。

そ・れ・か・らー

ザアアアアア

雨と風が激しくなる、ミウロは椅子に座って宿のロビーの窓から暇そうに外を眺めていた。

「全然やまないね。」

リーフも椅子をもって来てミウロの横に座り外を眺める。

「うん。あーひまだー。」

ミウロがボーとしていると、

「今からおばあさんのお話が始まるわよ　！」

とユーの声が聞こえた。ミウロのひれがピクンと反応したように動く。

「「なになに！」」

気になったミウロとリーフはそう言って椅子から飛び降り、お化けのようなヒラヒラしているポケモン、宿の世話人ムウマおばさんとエルとユーが座っている中央のテーブルにつく。そしてエルが言う。

「じゃおばあさん、この嵐の事教えて下さい。」

ムウマおばあさんは静かに語りだす。

「うむ、この町には百年に一度とてつもなく大きな嵐がくるという伝説があつてな、その嵐が来るたんびに炎の川にあるサンテリアの玉を天に投げなければならぬのじゃ。」

「はい、質問！投げなかったらどうなるんですか？」

リーフが手を挙げて質問した。

「投げなかったら、ずーっとなんか吹き続けるだろ。だから誰かが命がけで誰かが取りに行かなきゃなんのじゃ。」

ムウマおばさんが言い終わると、エルが席から素早く立つ。

「それなら、オイラたちが取りに行ってもいいですか?！」

(…出た。またエルのおせっかい…)

ユーがめんどーと思っていると、おせっかい人パートツーが言う。

(ミウロ)

「というかぜひ僕たちにやらせて下さい！」

ミウロがわくわくした様子で言うと、ムウマおばさんは

「……よからうよそ者に任せるのは本当はやめた方がいいのだが、そんなにやりたいのなら、仕方がない。」

「え うちはやりたい、！モコモコ」

ユーがつぎの言葉を出す寸前にミウロがユーの口を押さえ、「お願い！」と小声でささやく。

「仕方がないわねー。死んだらミウロのせいだからね。」

ユーもつまらなさそうにしぶしぶと賛成してくれる。ムウマおばさんはその場を見極め

たか、四匹に炎の中でも平気でいられるスーツを一人ずつ渡してくれる。

「ほれ。」

ミウロもスーツを貸してもらった。

「これ本当に着れるのか？」

そのスーツはミウロの体の形には全然あっていない。どんな感じかというと、まあ人間が着れるような形のスーツだ。

「まあ、着てみなされ。」

ムウマおばあさんに言われ、四匹はそのスーツを着てみた。すると、なぜかぴったしそれぞれ体の形にスーツが変形したのだ！

「すっげー！。」

リーフは歓声をあげながら、ぴったしサイズになったスーツを面白そうに見ている。

「ありがとうございます。ムウマおばさん」

エルはしっかりとムウマおばあさんにペコと一礼する。それに続いて、ミウロ、リーフ

も「ありがとうございます。」と言った。ユーは

「どうもねー。」

と適当にお礼をしていた。

「それじゃあ、炎の川まで案内しますよ。」

そして、ムウマおさんは地下に下りる階段のどこまで案内してくれた。

「ここを下りて行けばもう炎の川です。このヘルメットをかぶって行ってください。」

ムウマおさんはどこか寂しげな感じでミウロに全員分のヘルメットを渡してくれた。

「はい。ありがとうございます。」

エルは、張り切った様子でお礼を言い、四匹はヘルメットをかぶり炎の川へと繋がっているであろう階段

段をミウロを先頭にエル、ユー、リーフの順に下りて行った。

つづく！

第十五話 新たな敵（前書き）

また久々の最新・・・。

ミウロ「こっちのペースおそすぎ」

すまねえ。じゃあ、一気に再新しますから

第十五話 新たな敵

階段を下に下にと降りて行くと、こんどは上にあがる階段になった。

「なんだよ、今度は上がりかよー。」

ミウロはうんざりした様子で階段を上る。

「確かに、こんななら最初から少し降りてずーと真つすぐのほうがいいような気がする。」

ユーは「絶対間違えたのよー。」とまあそんな感じに言っている。

ゴオオオオオオ

パチパチ

火がすさまじい勢いで燃える音と火花の散る音がしてきた。それは登っていく内に音の大きさは増していく。

ミウロたちが無言で上がっていくとついに赤い炎が燃える川にいた。

「これが炎の川……。」

ミウロが呟く。炎の川はマグマのような川だがけしてどろどろではない、つねに燃えている音がして、火が流れているのだ。

「この川、変だよ。嵐が吹いているのに全然平気なんだもん。」
エルがミウロの隣に出てきながら言う。

「ホントだ。不思議だなー。」

エルの言つとおりだ。ものすごい嵐で雨が負けなくらい降っているのに炎の強さは全くいいほど弱まっていな。

「ミウロ！さつと行きなさいよ。サンテリアの玉を探しに行くんでしょー！」

ユーが二ひきの後ろで切れて目を吊り上げて二ひきの背中を蹴っ飛ばした！

「うわああ！」

ドン！！

エルとミウロはすごいスピードで向こうがわの土のかべに激突！
「いってーじゃんかあ、ユー。」

ミウロはガバツと土かべから顔を出す。よっぽど痛かったのか半泣きで怒っていた。

エルも「ふう。」と息をつくと壁から離れる。

壁にはミズゴロウが大の字になったの形とピカチュウが大の字になった形がくつきりと残っていた。

気を取り直しサンテリアの玉を探す事にする。四匹は川の真ん中にいて嵐が吹く中、話し合っていた。

「ここが待ち合わせ場所にしようぜ。」

と、リーフ。

「いいよ、じゃあねーー。」

ユーはそれだけ言つとさつさと下流へと川を下っていく。

「ユー早っ、もう行っちゃった。」

とエルはユーの後ろ姿（途中で潜る）を見送る。

「僕も行くか、じゃあエルたちまたなー。」

ミウロもそくさとユーの後についていき、

「オイラたちも行こうか」

「そうだな。あいつらについて行くか？」

「そうだね。」

エルとリーフもマイペースに下流へと下って行った。

「ないなーー。」

ミウロは少し行った所で、もぐって熱しんに玉を探していた。

潜ると、周りがすべて赤っぽく見える、当然自分の体も紫みtain色になっていた。

「下かな。」

ミウロは下を探すそんなものは一切見当たらない、次は少し上がって壁辺りを見てみると、パーー！と白い光がもれているのを発見！

「！、おお！これか！」

ミウロは興奮しながら土壁を崩す、と太陽のような暖かい光をはなつ玉が出てきたのだ。

「キレ」

手に取り、太陽のように光るサンテリアの玉を眺めているとサツ、なにかがミウロの前を横切る。

「？なんだ。」

なにかが無くなっている気がする……。

「???、ああああ！玉がない！」

そう、手に取っていた玉が跡形もなく消えていたのだ！

その時、

「ニユ、ニユニユニユー。」

少女のような笑い声がミウロの後ろから聞こえた。

「だれだ！」

バツ、ミウロが素早く後ろを振り向くと、そこにいたのはミウロと同じスーツとヘルメットを着たニューラだった。

ニューラは不敵の笑みを浮かべながら玉を片手でヒョイヒョイと投げたり取ったりを繰り返している。そして、ニューラは口を開く。

「あたいはマーニ、グラ様の命令でこれ（サンテリアの玉）を盗みに来た。」

「グラってまさかレンア国の奴なのか?!」

ミウロはもしかと思った。（もしかしたらザンの仲間かもしれない・・・）

「そうだけど、そう言えばザンがあんたの事ぶつぶつ言ってたニュ。」

「マーニはそう言って」「じゃあ、この玉は貰って行くニュ」とサーと下流へ泳いでいく。

「あ、コラ待てー！ー！その玉はこの町に必要なんだよ！」

ミウロも必死にマーニの後を追う、しかし早すぎて追いつけない。

「ニュニュニュ、おっそいニュー。」

ケラケラと笑いミウロにあっかんべーをする。

カチーン、頭にきた。（もう怒ったぞ！こうなったら、そうだ！）

ミウロは「かえせー！」「とマーニに向って『とっしん』！

「ニユ？！」

バツシーン！

正面から突っ込む、マーニは少し先まで飛ばされるが玉はまだ持っていた。

「くっそー。」

ミウロが悔しそうにしていると突然ゴオオオオオオと今まで静かに燃えていた川の炎がすさまじい勢いで燃えだした、と思ったらなんと川が左右別々の逆流になったのだ！

「なんだよ、わあ！」

当然ミウロとマーニもそれに巻き込まれ、上流に勢いよく流されていく。

でも、それはそれでミウロにはチャンスだった。なんせ流れの勢いが良すぎるので泳がなくてもマーニに十分追いつけたのだ。

「かえせよー！」

ミウロはマーニの横に並び玉を取り戻そうと手を伸ばす。しかし、マーニは素早くヒョイとよけ、また「ニュニュニュ」とからかう様に笑う。

「とろいねー。」

「なにー！このお『とっしん』！」
ドン！

ちょっと体当たりの様な感じでも思いつきりマーニにぶつかった。

「あっ！」

さっきの衝撃でマーニの手から玉が落ちる。

「もらったあー！」

ミウロは落ちて行く玉を素早くとると下流の方に流れている右の流れに慌ただしく乗る。

マーニもミウロを追って下流の方に乗りこもうとした。だか無理だった。

「な、何ニュ！」

マーニはその言葉を最後になぜかシュンと跡形もなく消えた。

その頃、リーフはエルと離れてしまい一人、下流の方に流されていた。身動きが取りにくく必死に抵抗

するが川の流れが早すぎて泳ぎがあまり得意ではないリーフには苦難だ。

（どうしよう……。）

不安がよぎる、もしこのままずっと流されてしまったら？

あの時の孤独感と不安がリーフを襲っていた。でも、リーフはあきらめず手足を動かし抵抗していると、やっと体が動いた！

「やった！」

リーフの体は岸の方に向かっている。やっと抜け出せる！と喜んだのもつかの間、

リーフのスーツの背中辺りが土壁にまぎれていた鋭くとがった大きな石に引っかかってしまった。

（やばい！）

リーフは慌てて石に引っかかりながらも体を乱暴に動かす。しかしそれが良くなかった。

びりり

リーフの背中辺りのスーツの生地が音を立てて破れたのだ。

炎はとてつもなく熱い、千度とはいわないだろう。もう一万度はいっているかもしれない・・・。

（オレ、死ぬのか？）

リーフはそのまま気絶した。

続くー！

第十六話 危機一髪！

エルも下流に凄い速さで流されながら、必死に体制を立て直している。少し先に浮いて

気絶しているリーフを発見する。

「あれは・・・リーフだ！」

エルは流れに乗りながら、クロールでリーフに追いつく。リーフは目をつぶっていて気絶している様だった。

「スーツが破れてる・・・、どうしよう。そっだ！」

エルはリーフの焼けてただれている所を手でふさぐいで抱えていると、

ドバアアアアア！

大きな音がした。なにかが押し寄せてくる！

「！」

エルがきずいて振り返った時にはおそく目をつぶる、物凄いのマグマのようなモノがエルとリーフを巻き込んだのだった。

嵐は相変わらずひどく、ゴロゴロと雷の音が時たま聞こえていた。ミウロはそんな中、逆流に耐えながら岸につかまっていた。さっき

物凄いマグマの様な物

にはなんとか巻き込まれずすんでとりあえずホッとしていた所だ。

でも、体力的には疲れて、息づかいが荒くなっている。

「はあ、はあ、もう玉を投げようかな…。」

ミウロはサンテリアの玉を曇って大雨のふっている空にかざすと白くまぶしく光るその玉が一つの小さい太陽に見える。

正直この玉をさっさと投げて終わらせたかった、でも

（投げるなら、みんなそろって投げたい！）

その思いだけでミウロは玉をスーツのチャック付きポケットに入れ、バラバラになった仲間を探すことにした。

今はだいぶ雨がおさまり、風の方が強まっている。

岸に上がるチャンスだ！

ミウロは岸に上がり、周りのようすを見渡す。風がけっこう強かったがまあ大丈夫だ。

「ここから、エルたちを探そう！」

川の下流、南へと人工の石だたみを走りながら進んでいると、ザ

アアアと滝の音が聞こえてきた。

そして、リーフとエルが流されながら気絶して浮かんでいるのを見した。エルがリーフをかばうように覆いかぶさっている。

もう少し行けば滝に落ちてしまう……！！

「エルー、リーフ！」

ミウロが顔を真っ青にして叫びながら流されているニひきに追いつこうと走る。

「ミウロ！どうしたの?!」

ユーの声だ。後ろから、ユーが息を切らせながら走ってきた。

「ユー、やばいんだ。エルとリーフが！」

ミウロは簡単に事情を話した。

「もたもたしてるヒマはないわ、ミウロ、エルたちをこっちに連れてきて！」

ドン！ユーがミウロを押す。

「うわっ」

バツシャーンと水しぶきが上がる。ここで（人使いあらずぎ）と言いたい所だが今はそんな暇ではない。

ミウロはあと数メートル先にいるエルとリーフに追いつこうと一生懸命泳ぐ。でも、気絶しているニひきも当然流されていてなかなか

か追いつけない。

そしてついにエルとリーフがふっと消える、滝に落ちたのだ！

「エルー！リーフ　！！」

ミウロは二ひきの名前を呼びながら落ちる寸前のエルとリーフのうでをギリギリつかんだ！

「ミウロ、つかまって！」

ユーが手を差し伸べてくれ、手をつなぐ。

「よい、しょー！」

思いつきり引つ張るが、流れのせいでなかなか持ち上がらない。

「がんばれー！ユー。」

ミウロも岸につかまっではい上がろうとするのだが、片手なので厳しかった。

「うっ……」

ユーは歯を食いしばり頑張ったが、体はズリズリと川の方に引きこまれている。そしてついに恐れていた事態が起きてしまった。

「きゃあー！！！！」

ドボーン、ユーが叫びながら、ミウロの横に落ちた。その衝撃でミウロも岸から手を離してしまった。

「え、うそ」

ミウロはやば…と顔が青ざめる。

ザアアアアア…!!

「わあああああ!」「きゃあああああ!」

そして、凄い流れに乗って四匹全員滝へ落ちてしまう…!

もうおしまいだ…。

ミウロは目をギュツとつぶる。体が浮いているような感覚がした。

そして、ミウロが覚悟をきめたその時!

パアッ

なにかが光った、そんな気がした、いや光ったのだ。

ミウロは落ちながらとりあえず持つて来ていた虹色のはねをポケットから出す。

「あ!」

確かに光っている、はねは七色にキラキラと光っていた。

その光はしだいに大きくなり、ミウロ、ユー、リーフとエルを丸く広がりながら優しく包みこんだのだ。

「あれ、これは?」

今まで目をつぶっていたユーは暖かさを感じて目を開く。

「虹色のはねが助けてくれたんだ。」

「ふーん、」（なんか見覚えがあるわ）

ユーはそっけないようなそうでも無いような感じで言っていると、エルとリーフが目を見ました。

「んん?!ここどこなんだよ!」

リーフは物凄くびっくり!ミウロは二ひきに簡単に説明した。

四匹を乗せた丸い黄色の光はゆっくりと上がり嵐の空に舞い上がる、
ビュウビュウと風や雨が押し寄

せてきていたが、中までは入らず安心する。

「ミウロ、そう言えば玉はあったの?」

エルが聞く、ミウロは今まで忘れていたサンテリアの玉をポケットから取り出し、

「ほら。」

と太陽のように輝くばかりのサンテリアの玉をみんなに見せてあげた。

「おお！きれーだな」

「そうね」

リーフとユーが玉を見ながら言っていると、サンテリアの玉はいつそう輝きを増し宙に浮いた！

そして、ミウロたちを乗せている光の輪に穴が開くと玉はまぶしく白く光りながら、

そのまま玉は空に吸い込まれるように上がって行き、やがて消える。

その一部始終をミウロ達はポカーンと口を開けて、見守っていた。

「す、スゴイ…」

ミウロは玉が吸い込まれるようにあがっていた空をまだ見上げていた。

続く！！

第十八話 ユーVSロコン 夜のお疲れさんパーティで

嵐も静まり、星が輝くきれいな夜になった。家々には暖かな明かりが灯り、それぞれ幸せそうに暮らしている。ミウロたちも宿に戻り何をしているのかと言うと・・・。

カーンツ「くくくくくくくくかんぱーい!」「くくくくくく」

みんな声をあわせて言うそれと同時にぶつかった七つのグラスの身、オレンジジュースとワインが揺れた。

「ごくごくごく・・・、ぷはあー!うまかったー。このオレンジジュースサイコーだろ」

さっそくオレンジジュースを高速で飲み干し満足顔で言ったのはミウロだ。

「はやっ、もう飲んだの?!」

その横でエルがジュースをゆっくり飲みながら驚いている。

「まーな」

ミウロは得意顔で言い、さっそくグラタンに手を付けた。エルもチキンをとり食べる。

一つのテーブルにミウロ、エル、ユー、リーフ、そしてムウマおばさんと近所の気前のいいコートスさんと、ロコンさんが囲んでいる。

テーブルには色とりどりの料理が並べられていてそれを自由に取って食べるという感じだ。

リーフは、ケガの手当てをしてもらいがつがつと色んな料理を食べまくる。

「うつまあー！オレこんなの初めて食べた。」

ひとつの料理を食べ終え、とっても幸せそうに満面の笑顔で言う。

ユーは優雅に食べながら対象的に

食っているリーフを横目で見る。

「たしかにねー、でもまあまあかな。」（うちの城の料理といい勝負だわ・・・。）

ひそかにライバル心を燃やす、この料理たちを作った本人はユーの向かい側に座っているロコンはさっきの言葉を聞いてなぜか（良く言うじゃん）と燃えていた。

「ん、ロコンなんかすごいギョウソウね」

ロコンの顔を見て笑いながらかったユー、ロコンは「料理、追加してもいいですか？！」とバン！テーブルを叩きユーを睨む。

「別にいいわよ」

ユーはどこかしら（やってやろうじゃない）というようなオーラを出しながら言う。ロコンは「待ってて！」

と調理場に入って行った。

「……………、なんかすごい事になった？」

エルがミウロに囁く、ミウロは笑って

「むぐむぐ・・・いや、おもしろい事になったんじゃないか」

とこれから始まるであろうバトルらしき物にわくわくしながら（料理をばぐばぐと食い散らしながら）

言った。

「あいつに絶対おいしいって言わせてやる！」

ロコンは調理場でフライパンを揺らしてチャーハンを作りながら、
呟いていた。

どうでもいいバトルがまくを開ける ！

「おまちどう！」

ガタン！

平たい皿に入ったチャーハンが乱暴にユーの前に置かれる。

「たべてみてよ」

ロコンが腕組をし、自信満々に言う。

「いいけど。んー、モグモグ…」

ユーは二口食べると、スプーンを置き、かなりいまいちと言う感じに言う。

「びみょー」(まだまだね)

そして、「そうだ!」何か思いついたか続けて

「あんた、うちを満足させる料理を作つてよ!」

ユーが余裕あるような感じでビシッとロコンを指差す、目がキラんとかすかに光った。

「くうー、待つてろお!」

悔しそうにロコンは走りながらまた調理場に戻っていく。そのあと、

「「おかわり!」」

がつがつと食べていたリーフとミウロが同時に皿を上げた。

「どうだ!」

今度は、魚のムニエル(白い粉をつけ、焼いたもの。けっこうつまい)がドンツとおかれた。ユーはムニエルを食べ終わり、感想を述べる。

「ふう、こんなじゃ全然ダメね。」

「次!」

ロコンはいさぎよく調理場へ駆けこんで行く、さっきからずっとこの調子でもう、十皿目になっていた。まだ、ロコンは一度もユーが

満足する料理を作れていない。

「どっちもゆずらないねー。」

エルはそんな感じでジャムパンを食べながら二ひきのバトルを見守っていた。

「「おかわり！」」

もう食べ終わったのかミウロとリーフがまた同時に皿を上げる、ついでにこの二ひきも十皿目のおかわりなのだった。

それから・・・

「出来た！これはずっと求めてきたあの味！…よし、いける！」

ロコンはうれしそうにその料理を味見するとさっさと皿に盛り付け、調理場を出て行った。

「これで、どうだあ！」

ガタン！

ロコンはこの三十皿目に駆ける！と言わんばかりに大声をはりあげながら、そのカレーを置く。

「さて、どうかしら」

一口、カレーを口に運ぶとユーの体にスゴイ衝撃が走った。その瞬間、ユーは

「お、おいしい！」

つつい言ってしまう、でもそれくらいカレーがおいしかったのだ。

「やったあー！！！」

ロコンは嬉しそうにピョンと飛び跳ねる。

「どうやってこんなを作ったの、教えなさいよ！」

「いいよ、これはねスパイスを」

なーんてロコンは興奮しながら説明する。

「これは、ロコンの勝ちだな」

ユーの隣で料理を食べまくっていたリーフが言う、でもその言葉は新たに始まるバトルの合図となる。

「うーん、でもちょっと辛かったからねー、ムリだね。はやくつぎの料理持ってきて」

（負けてたまるか！）

ユーは野心を心の中で燃やす。

「ちえ、まだまだー！」

ロコンはまた料理場に駆けて行く、

なんか、きりがないのでこの辺で。

コケコッコー！

町のどこかでニワトリが鳴く。

五月晴れの中、ミウロ達四匹は思ったよりも長い炎の川の橋を渡る。

「あー、昨日は楽しかった。」

ユーはにこにこしててご機嫌だ、なんだかんだいって楽しんでたんだなーそんな事をミウロは思う。

「うん、白熱のバトルだったね」

エルもどうやら楽しんでいたらしい。

「オレは料理がうまかったー」

「それ、どうかーん」

昨日がつがつと食っていたミウロ、リーフは昨日の料理を思い出していた。

（アルセウス、きょうも頑張りますよ！）

エルはひとときしりみんなと話すと、心の中でそう誓う。

それから、橋を渡り終わるとゆるやかな下り坂になり、ミウロ達は

その下り坂をワイワイと騒がしく歩いて行っ

た。

その先は「吸血どうくつ」だとは知らずに

！

続く！！！！

第十九話 吸血洞窟で（前書き）

ものすごくひさしぶりだ〜

ミウロ「こっち、どんだけ放置してんだよ」
すまないです・・・

ナーフファイアはポケノベの方がすすんでます（焦）
最新がみたいっ！てかたはYahooで「ナーフファイア」と検索し
たらポケモンノベルのほうのが一番最初にでてきますよ〜

第十九話 吸血洞窟で

キーキーキー！バサバサバサ

薄暗い洞窟のどこからかコウモリ、いやズバットの鳴き声が聞こえてくる。

ミウロを先頭にしてその中を進んでいると、ドン！

「わっ、なんだ？」

ミウロが何か黒いものにぶつかる。

「岩…じゃないね」

エルはミウロがぶつかった所に手をそえる。手触りは固くはなく、暖かくて薄い毛が生えてるみたいだ。

「ふーん、じゃあこれが何なのか確認してみるわ」

ユーがエルのとなりに出てきて「エナジーボール！」シュウ、
緑色をした光の玉を頭の上につくりそれを黒いものにぶつける。

「キーーーーー！」

そのとたんこんな声がして、

バサバサバサバサアアア！

黒いものからたくさんズバットたちが次々と飛び出し、ミウロた

ちを襲ってくる！

「『みずてつぽう』！」

バシユウ！

ミウロの口からあふれ出る勢いついた水はズバットたちに直撃する。

「キー、キ！」

バサバサバサ

何匹か逃げて行くが、だいたいは攻撃をよけ、また襲ってくる！

「わああー」

エルは我慢できず、涙目になりながら逃げた。

「あ、エル！までよ」

リーフが過ぎ去るエルを呼びとめるがエルの耳には届かず

そして、エルに続きユーも

「後、お願い！」

そう言ってミウロとリーフの横を通り過ぎた。

「ユー！」

ミウロは洞窟の出口に逃げるユーを追いかけようとするが、そんなヒマは無い、なぜなら

数匹のズバットがミウロのすぐまん前まで来てたからだ。

キイイイ！

ガシィ、ズバットのきりさく攻撃がミウロの頬に当たる。それに続いて他のズバットたちもミウロを囲んで攻撃を開始する。

「くっ…」

「あ、ミウロ！どけえズバット『でんこうせっか』だ」

ミウロのピンチにリーフは素早くじぐざくに走りながら「おらああ！、ドン！とズバットの群れに突っ込む！

「ツキイイイ！」バサバサバサ

囲んで攻撃をしていたズバットたちはバラバラに飛びさる。

「ありがとう、リーフ」

体中傷だらけのミウロが頭を下げお礼を言う。リーフは笑い「どういたしました」と返した。

落ち着いて安心したのもつかの間、

「お前らの血、頂くぞぉー！」

誰かの野太い声がした。

「？」

二ひきはキョロキョロと薄暗い洞窟を見渡していると

「かくごしろおー」

真上からズバットの進化系、目が鋭く口を大きく開けたゴルバットが二ひきめがけて襲ってきたのだ！

「おりゃあ！『はっぱカッター』！」

「くられ、『みずてつぼう』！」

ヒュンヒュンヒュン！

鋭いはっぱ達がゴルバットの顔に当たり、その次にバシユウと、とぎることなく大量の水達があたってゴルバットは洞窟の天井に戻る。

「やっやめろー」

ドン！そしてそのまま天井に突きつけられた

「いいよ」

ミウロは言われるままパツと攻撃をやめると、ドサッ、ゴルバットは勢いよく地面に叩きつけられたのだ。

「……………」

ゴルバットは動かない、気絶している！

「「やったあー」」（弱かったー！）
パン！二ひきはハイタッチをし喜んでいとエル、ユーが戻ってきた。

「ごめんね、つい逃げちゃったよ」

エルがもうしわけなさそうに謝る。ユーも「ごめーん」と全然反省してない感じで言った。

「いいよ、けっこう余裕だったしな」

本当はそうではない気もするけど・・・

その事は傷だらけの体を見ればすぐ分かることだ。

「そうだ！ミウロ、ちょっと来なさい」

「ん？なに？」

ユーに手招きされ、行くとシュツ、何かをかけられた。

「？なんだよ、これ。」

けっこうしみて痛かった、かけられた場所は傷の部分だ。

「こんなのも知らないの？あんたほんつと田舎者ねー」

ユーは手をぶらぶらと振りながら消毒液をミウロに見せる。

リーフも消毒液を初めて見たらしく、ジーとそれを見る

「...それ、なんだ？」

「リーフも知らなかったの?!これは消毒液!」

シュー、消毒液をリーフにかける。

「?!なんじゃこりゃあー」

わああとひるがえしよける、それがおもしろかったのかユーはクスクスと笑いながらミウロの残りの傷、全部に消毒をする。

「いてて、いてっ」

ミウロはかけられるたびに悲鳴?をあげて痛そうにしていたが、その内終わりユーは手を止める。

「よし、いいわよ。」

「ありがとう」

何ともいえない感じでミウロはなんとなくお礼を言う。

「ばんそうこうは貼らなくていいの?」

とエルが聞くとユーは「ふふん」と上機嫌に

「この消毒液は、シューと傷にかけるだけで傷口をしっかりとガードしてくれるのよ!」

自慢げに消毒液をミウロたちに突きつける。

「へえー。すごいねー」

反応がいいのはエルだけで後の二ひきは「ふーん・・・」とあまりしつくりこなく、冷たい空気が吹いたのだっ、ユー「／／／／うるさい！」ゲシッ

§

気を取りなをして再出発。

ミウロとエルをまた先頭に進みだす、エルは怖がりを直すため自分から進んできた。

「ドジないようにねー」

後ろでユーが言う、エルは

「だいじょうぶだよ！」

後ろ歩きで笑いながらそう言っていると、ゴン！案の定、岩に頭をぶつけてしまった。

「いったあー」

片目をつぶり、両手で頭を押さえる。痛みに耐える打ったのはどうやら頭のでっぺんのようだった。エルはよろよろと後ろに下がると、ガコッ、足元で地面が崩れた音がした。

「エル！」

薄暗い中、ミウロはいち早く危険を察知してエルの手をつかむ。エルの足元は地面のかわりに穴がぽっかりと口を開けていた。

「ミウロ……。どうしよう」

エルは不安そうに顔を上げミウロに言う。

「心配するなよ」

けっこう苦しそうに答えていると荷が軽くなった気がした、そう
リーフとユーも手伝ってくれていた。三びきで力を合わせ、少し
づつでも確実にエルを引っ張り上げる。

そして、あともうちょっとだったその時、今度はズバットの数十
ぴきの群れがミウロ達を襲ってきたのだ！

キーキー！

たくさんのズバットたちはバサバサと飛びながらミウロたちを囲
み邪魔をする。

「邪魔！」

ユーはイラつき『エナジーボール』をミウロの周りに集まっていた
ズバット達目掛けて飛ばす。

「わあ！」

ズバットたちに飛ぶ前に自分がやられそうだったリーフはさっと頭
を伏せる。

ドカン！

『エナジーボール』はその群れらに見事あたった！のだが…

ピシ…

同時にさっきの衝撃だろうか、ミウロの足元が崩れ始めたのだ。

「わああああ！」「助けてー」

「ああ！ミウロ、エルー」

二ひきは深い穴の中へ落ちていく、びっくりして手を離してしまった。
ていたリーフの声はむなしく穴の中へ吸い込まれていった。

next 洞窟迷路

第二十話 洞窟迷路（前書き）

またまたごくまれ最新ですよ。
はやくおいつきたいですな。（遠い目）

第二十話 洞窟迷路

ミウロ、エルは長く深い穴に落ちていた。
黒くこつこつしている地面がどんどん近くなってくる。

「くそー」

どうする事もできないくやしさを感じながらミウロは歯をくいしばる。

「ミウロ、もうオイラたちダメなのかな」
とエルが覚悟を決めて目をつぶる。

（そんな事ない！）

ミウロは頭の中に浮かんできたその言葉を言おうとしているとき、
地面まではあと一メートルになっていた。ミウロはそれを今頃きずき、下を向くとびつくりする。

「ん、わああ！」
ドサ

「よつと」タッ

ミウロは背中から、エルは足からバランスを崩しながらも着地した。

「いてえええ、ん？痛く、な・い」

背中から落ちたのにもかかわらず、なぜか痛みがない、ミウロが不思議に思っているとエルがリュックを指差す。

「リュックがクッション代わりになっただんじやない」

「ああそうかあ、なるほどー」

ミウロは心の中でありがとうな、とリュックに言った。

「ところでさ、ここはどこなんだろ？」

エルは自分達の周りをみわたす、二ひきのいる場所はさっきいた穴の上よりもっと暗く、湿っていてじめじめした感じだ。そのせいか、岩の半分はコケや草で覆い尽くされていた。

そして目の前には道なのだろうか、通路が続いていた。

「とりあえず、この道をいってみよう」

ミウロはエルの手を引っ張り、歩き出した。

それから

まだ、二ひきは洞窟の中をさ迷い歩いていた。歩き出してから、何時間たったか分からないくらいだ。

辺りは相変わらず岩とコケと草ばかりで何一つ変わっていない。

そんな時、見覚えのある岩の前を通っていると、エルが呼びとめた。

「あれって、穴に落ちた時にあつた岩じゃない？」

「本当だ！」

記憶力があまりないミウロでもこの印象的な岩は覚えていた。この

岩はなぜか形がとってもユーに似ているから、かもしれない。

「ということは、僕らここを一周しちゃったってことかよ」

このパターン、良くありがたやつだよなー

そんな中エルは上をみあげてみる、ずっと高い所に穴が開いていて上からかすかに風が吹いていた。そして顔を下げ、なにかをひらめいた。

「もう一回行ってみようよ！隠れ通路があるかも知れないし」

「でも、暗いし見落とすかも知れないぞ？」

「それは大丈夫！」

エルは自分の肩掛けカバンからでんき玉を取り出し、こつこつした地面に置く。そして

「えいつ」

バチバチッ

と軽いでんできをでんき玉に浴びせた、すると、ほわあーとでんき玉から出る黄色い光が

エルとミウロを明るく照らす。

「へえー」

ミウロはただただ感心するばかりだ。エルは玉を持つと前を照らし

「じゃあ、いこっか」
と誘導した。

今度はエルを先頭にして歩いて行く。でんき玉のおかげで周りが良く見えていい、もしかしたら秘密通路を見つけられるかもしれない！
そうミウロが思っていると、きゅうにエルが立ち止る。

「どうしたんだ」

エルは答えず岩壁をじっと見てるだけ、だと思いきや嬉しそうに言う。

「ここに何かあるかも！ミウロ、『みずてつぽつ』をこの壁に向けて撃ってくれないかな」

「おっ」

ミウロは短く返事をし、思いつきり息を吸うと「てい！」かけ声と共に大量の水をから発射する。

バシャアア

水はその壁にしばらくあたっていると、ガラガラガラ、だんだんと岩壁が崩れ始めたのだ。

「もうちょっとだ、がんばれミウロ！」
エルは応援しながら壁とミウロを見守る。壁は半分以上もう崩れて

いて、黒い闇が顔を覗かせていた。

「このおー」

さすがにこの大量の水を出していると疲れるてくるが、あともう少しそう思うとまだ頑張れた。それから、ついに

ガラガラ！

全部の壁が崩れた。壁があつた所はどこかに繋がっているであろう長方形の入口になっている。

「ふう〜」

ミウロは疲れて座りこむ、エルは「おつかれさん」と優しく声をかけてくれる。さつき

のでけつこう体力が消耗していたのだが、二十分も経つともうミウロは復活していた。

でんき玉で照らしながら二ひきは暗い通路を歩いていると、日の差しこんでいる小さめ

の部屋にでた、中央には大きな石がたくさん積み重なっているようなポケモン、イワーク

が寝ている。話会いするまでもなくミウロはさっそく

「よっしゃ、起こして戦おうー！」

そう言いながらいさぎよくイワークの所へ、エルもあとからついてくる。

「やいやい！そのでかいの、僕らと勝負しろ！」

バシユ、『みずてつぽう』がイワークのほほに当たる。イワークは片目を開け、ふああとあくびをしてめんどくさそうに起き上る。

「なんだ、ガキども。どっから入り込んだ」

図太い声が響く、二ひきはあんぐりと口を開けて自分達の6倍はあるイワークを見上げた。

何も答えずただポカーンとしている二ひきにイワークは首を低く下げ、もう一度聞く。

「お前ら、ここを通してほしいのか？」

「は、はい！」

ミウロは攻撃態勢で答える、イワークは「ふう」とため息をつく

「それならわしを倒してみろ！」

と言う、おおきな蛇が猫を見下しているような感じでイワークとミウロ、エルのバトルがスタートした。

「『みずてつぽう』だ！」

先行をとったミウロは素早くジャンプして『みずてつぽう』を打つ。
『みずてつぽう』はイワークの顔にあたった！

「『アイアンテール』！」

今度はエルがしっぽを白く光らせながらイワークの懷に突っ込み、バッシーンとしっぽをぶち当てる！イワークは後ろの壁にドンとぶつかる、ガラ、少し壁が崩れた。

「うおおおお、やるなあ。次はこっちだ『がんせきふうじ』」

ゴゴゴゴ...

地響きがしたと思うと、ガラガラガラッたくさんの岩たちが降ってきたのだ！

「ひえー！」

ミウロとエルは慌てて逃げまわっていると、イワークの後ろに外の光がもれているのを発見した。

「あの穴から出よう！」

「うん」

二ひきはうまく岩をかわしながらイワークの横をすり抜けた！

「まさか！」

イワークは少し下に見える出口をみる。でもミウロ、エルはもう出ており姿はなかった。

「はあー良かったあー」

ミウロはホッと一息つき、洞窟の壁にもたれ掛かる様にして座る。

「うん、あぶなかったねー」

んーと伸びをし、エルは外の心地よさを改めて実感した。

洞窟をでた所は森で、真ん中に広い真っすぐな道が続いている。その道を左右両方に木々が気持ちよさそうにサワサワと音を立てながら、たたずんでいた。

「あー！いたー！おい、ミウローエル」

リーフが向こうから走ってきた、もちろんユーも一緒だ。

「ぶじだったのね。まったく、どうしようかと思っちゃったわ」

ユーはホッと安心した顔つきで、座っていたミウロ、エルに言う。

「まあね、でも僕らもう無理かと思ってたんだけど」

「ミウロが頑張って隠し通路を開いてくれたんだ」

ミウロが言う続きにエルが身ぶり手ぶりで言った。

「なあ、はやく遺跡にいきましょう」

待ちきれなくなったリーフはもう先に森の道を走り出そうとする。

「遺跡？」

ミウロの頭に？マークが浮かぶ。

「うん、この先に古代の遺跡、てか建物を見つけたの。」
とユー。

「その、遺跡とやらに今すぐ・・・
ゆっくり行こう」

ミウロがスローで右手をあげ歩き出す、ほかのみんなも「おう」とゆっくりスローで答えた。

周りからみれば変な集団は、ゆっくり森の道を歩いて行くのだった…。

続く

第二十話 洞窟迷路（後書き）

なんだこのヘンテコ集だん・・・

ミウロ「あはは。まあいいじゃん！」

おいおい、てかこんなキヤラだっけ？そうか、そーいやのんきなやつだったってことを忘れてた・・・。

第二十一話 戒めの遺跡

森の道はすぐに終わり、右に向こう側に渡るけっこうでかい橋がかかっていて。その橋の下には、大きな川があり、四匹は思わず足を止める。

「でっかあー」

ミウロは橋の手すりから顔を出し、下に見えるにぎっているけど、どこことなくスゴイ川を眺める。大胆に下流に流れていて堂々としていて存在感あふれていた。

「深いかな」

エルが川をじーと興味深そうに眺めている所をドン！とユーが押す、

「わっ、びっくりしたー」

「クスクスクス、ひっかかったわね」

手すりがあったから落ちなかったのだが、かなり怖かったようだ。エルは少し顔が引きつっていた。

「エル、ごめんねえー」 キャハ（おい！）

ユーがかなりわざとらしい謝り方をする、ミウロの場合、キレるのだがエルは暖かく「いいよ」とゆるしていた。

「さっさと行こうぜ！」

突然そう切り出したのはリーフ、炎の川で最悪な目にあってからどうやら川がニガテになったらしい。

「そうだね、早く遺跡に行こう！」

エルも歩き出し、それに続いてユーも歩き出す。

「あ、待つてよ！」

いつの間にか三びきはミウロを追い越し歩いて行く、置いてけぼりにされかかっていたミウロは慌ててついて行った。

橋を渡り終え、横並びになって再びひと気のない森の道を進んでいくと、

「ここだぜ。」

リーフが右にあった小山に登れるのか、古い階段の前で足を止める。階段の途中に「戒めの遺跡」と古い看板が立っていてその下に「近づくべからず」と継ぎ足されたように墨で書いたような字で書いてあった。

「ここが遺跡の入口なのよ」

ユーが案内人のような口調で言う。

「入っていいのか？」

一番に看板を見つけたミウロがユーに聞くがユーは「当たり前よ」と堂々と答える。

「ま、いいか」

こんな感じで看板は完全に無視され、ミウロ達は上がり斜めに続く木の古い階段を上って行った。

しばらく、急な階段を上っていると四角い少しひびの入った灰色の色をした建物を発見した。その建物はどうやら入口の門のようだ、少し先に小さな石重ねの祠ミヅウミが見える。

「へー、あれが遺跡なのかあ」

「思ったより、殺風景ね」

とミウロとユーが思い思いの感想を述べながらやつと階段を上り終えた。

「これが古代の遺跡？」

エルが浮かべた想像とは少し違うようだ。意外と少ない建物に少々驚いているようだ。

「なんか、不気味じゃねえか」

リーフのその一言でしんとなり、一同は進む足を止める、確かに不気味といえは不気味だ。

草は伸び放題で地面に敷いてある石はひび割れている、おまけに昼間だというのに木がおおい茂りすぎて、日の光が入らず薄暗い。そんな中遺跡がポツンと立っているので一層不気味さが増していた。

「オイラ、怖いよー」

エルは震えてミウロのリュックをつかむ、ミウロはごくつつばを飲み込んだ。

「どうする、ユー」

困ってユーの方を向いた。

「引き返すわけには行かないわね、そうだミウロが様子を見に行つてよ」

言われるかと思っていた言葉が返ってくる。ミウロは「いいよ、じやあ行つてくる！」

と恐れもせず遺跡を見に行った。

門をくぐり、石を積み上げられた感じの古いほこらに近寄る。ほこらの中央にある正方形のくぼみを良く見ようとミウロが一歩近づく、

ポチ

足元で何かスイッチのようなのを押してしまったらしい。

「な、なんだ？」

なにが起こるのか、ミウロはときどきしてほこらをじっと見守っている、

ゴゴゴゴ、ガシャン！

祠ほこらの中で何かが移動したようだ。

「あ！」

ミウロは驚いて声を上げる。なんと、くぼみの所がズズズーと下がりほこらの奥へと続く入口がでてきたのだ！

「何、どうしたの?!」

と、ユー。さっきの音を聞いて、後の三びきが駆けつけてきていた。

「すごい事になったよ、みんな行く？」

ミウロは内心わくわくしながら、楽しそうに聞く。エルは少し嫌な顔をしてたが

「行くよ！」

と嫌な思いを振り切るようにして答えた。リーフも

「俺も！」

と手をあげ元気よく言い、ユーは「仕方ないわねえ」としかたなく賛成する。

でも、本当はユーが一番この遺跡に興味があつたりするのかもしれない。

中は暗かった。もちろんミウロが懐中電灯で道を照らしながら一番先頭を進んでいく。道幅は狭く、一人ずつしか入れない、地面、壁は岩で洞窟を連想させる。

「ん？何かあるよ！」

と、エルが叫ぶ、前方に箱のようなものを見つけた。

「もしかして、お宝か？」

ミウロが近くに行き、その黒い箱を懐中電灯で照らしながらそう言っている。

『この箱を早く持ち出してくれないか？』

初めて聞く誰かの声がした。

「うん」

エルに懐中電灯を渡すとその黒い箱を抱える、そしてそそくさとはこらを出て、黒い箱を地面に置くと、なんと箱から緑色の光がもれだしたのだ。

「わああ！」「何よ、これ」「ひゃあ！」

四匹はとっさに箱から身を離す。

緑色の光は箱をついに開ける、その箱の中には緑色のウロコが入っていて、光はそのウロコから出ていた。

「うっ」

ものすごい眩しさでミウロは目をつぶる、エル、リーフ、ユーも顔をそむけ同じことをする。

とたん、緑色の光は消え、眩しくなくなる。

「なんだっただよ」

ミウロはゆっくりと目を開けた。

目の前にいたのは、なんと巨大な緑色をした蛇のような体をした目の鋭いポケモン、でもどこか温かいふいんきを持つレックウザだった。レックウザはミウロ達に話しかける。

「勇気ある者たちよ、我を助けてくれ本当にありがとう。」

レックウザの表情はかわらなかったが、声で気持ちの暖かさが伝わってきた。

「いえ、とんでもないです。それよりどうしてウロコになっていたんですか？」

ミウロがさっそく質問する。レックウザは目を遠くに向けると、

「ちょっとついてきてほしい」

そう言って背を低くする。

「乗れって事かな」

エルが囁く、リーフは「そうに決まってんじゃない」と一番乗りでレックウザの背にまたがった。

「僕ものる！」

次にミウロも飛び乗る。レックウザはエル、ユーにも『さあ、君た

ちも乗りなさい』と声をかけた。

エル、ユーもミウロの後ろに乗ると、レックウザは空高く舞い上がる。

「わあああ！すっげえー高い！」

ミウロは興奮気味だ、興奮しているのはもちろんリーフ、エル、ユーも同じでみんな、下に広がる風景に少々驚きながらも、わくわくと楽しそうだ。

上から見るとここ辺りは山に囲まれていて中央にはさっき見てきたあの大きな川が流れていた。そして、岸の方に右と左両方に道が続いている。

「この先の町に向う、しっかりつかまってくれ」

「……はい！」「……」

四匹が元気よく返事をする、

「では、行くぞ！」

ミウロ達を乗せたレックウザはゴォと音を立て、ものすごいスピードで川の上空を一直線に飛んでいく。

「ぎゃあああああ！」

そのとたん、ミウロの悲鳴が辺りを響かせる。エルはレックウザにしっかりつかまり、目をつぶって耐えていた。

「けっこうきついわねえ」

エルの後ろに乗っているユーも、片目をつぶり強風に耐える、こんな中で一番楽しそうなのは

「ゴーゴー！もっと飛ばせ い！」

はしゃいで一番前に座っているリーフだけだった。

そして、町。

白い霧がただよう中、ミウロ達はレックウザの背から飛び降りて、町の状態に一瞬、声を失う。

「なんだ、ここ…」

ミウロが呆然とその町並みを見る、辺りは薄い霧におおわれていてシーンとしていて、緑の木々は疲れきったようにまるで元気を失ったかのように立っている。なんというか静かすぎてかえって不気味な感じがした。

「川も枯れてる」

悲しそうな顔でエルがそばにあった橋からもう土が丸見えになって乾いている川を悲しそうに眺める。

ユーは、ふーんとその状況を見極めると

「どうしてこの町はまるで死んだ見たいになっているのよ」

体の何十倍もあるレックウザを見上げて聞く。

「それは……」

レックウザはまた遠い目になる、でもその目には意味あり気に鋭く強い意志が現れていた。そして、語り始める。

「実はあの遺跡に閉じ込められる前、我はこの町ヒルタウンの守り神だった。」

山沿いにある野原、ここに幻の塔と呼ばれ、選ばれし者しか行けないという塔があった。

そこにはヒウンタウンの守り神、レックウザが住んでいた。

「今日も平和だな」

レックウザは、平凡な町並みを窓から眺めていた。その後ろ姿をねらう奴がササッと物陰から出てくる。

物音ひとつ立てずに

そして、レックウザの大きな体の後ろ姿に思いつき『きりさく』攻撃！

ザシュッ

空気の切れる音がした。

「くっ」

レックウザは少しよろめき、耐えながらちらと後ろを見たまま喋る。

「お前、何者だ。」

そいつはグライオンだった。

「俺はレンア国の者だ。もうすぐこの町は闇のディアルガ様のものになるのだ。お前はさっさと消え失せろ！！」

突然、ピカ！グライオンの牙のような手から濃い色の緑色の光がでた。と思うと一瞬のうちにその光はレックウザを取り巻く。

「うおおおおおお！」

レックウザは苦しさの余り、雄たけびを上げた。その光はレックウザの身動きを止め、締め付けるように痛みつけている。

「ふっ、伝説のポケモンもこの程度か」

グライオンは鼻で笑うと手を閉じる。するとレックウザを取り巻いていた光は今度はスゴイ吸引力を発揮した。

「ぐわああああーやめろー」

苦しそうに叫ぶ。しかし光はレックウザの言葉は聞かず、取り巻いたまま小さくなると、やがてポトと床に落ちた。

「あんがい、弱いんだな」

グライオンは「ふはははは！」と勝ち誇った勝者のように不気味な笑い声をあげながら今では緑色のウロコとなったレックウザを拾い上げると、

「これは、誰も近ずかないあの戒めの遺跡にでも封印しておくか」

ばそとそう呟き窓から飛びだって行った。

続く!!

N e x t 時の塔

第二十一話 戒めの遺跡（後書き）

いつきに最新！

三話目もいくぞ〜

第二十二話 アウレント

「ミウロ、ミウロ！」

暗闇の中でエルの声がした。

「え……」

ミウロはハッと我に返る、エルがミウロの顔を覗きこんでいた。そして周りも、元のきりのかかった町になっている。ここは、公園だろうかエルの後ろに遊具が見えた。

「どうしたの？さっきからボーとしちゃって」

「うーんと、レックウザとへんな黒くて手が大きい……」「何いつてんのよ、ミウロ」

ユーがギューとミウロの足をふみ、話の途中に割り込んできた。

「いたっ、だつてさ見たんだよ。知らないポケモンが過去のレックウザをウロコにして塔の窓から飛び出していったのをさ！」

痛いのを我慢しながら反論する。それより、ユーはさっきの映像を知らないのだろうか。

ユーは、

「ちよつと熱でもあるんじゃない、頭がおかしいわよ」

ふーあきれた！って言うような顔で言い、足を踏むのをやめる。そ

んな中ミウロの話を興味深そうに

聞いていたレックウザが冷や汗を垂らしながら目を大きく開く。

「お前……まさか……………」

「なんだ、レックウザ」

ミウロがキョトンとした感じで、相変らず失礼な聞き方をした、レックウザは戸惑いながらも話しを続ける。

「お前は……、神とつながれる世界にも少ないポケモン、「アウレント」だろう？」

どういう意味かミウロには理解できなかった。でも、なぜか

「はい！」（えええ？！口が勝手に動いた?!）

と答えてしまったのだ、もちろん無意識に。するとレックウザはしっかりと確認するようにもう一度聞く。

「その、「はい」は勝手に出たのか？」

図星だ、ミウロは「う、うん」とうなずく。

「やはり、な」

そう言って目を細めた、口元が少しだけほころんでいる。

「で、その「アウレント」ってなんだ？教えてくれないか、レック

ウザ」

なぜか聞いたのはリーフだが、「いいだろう」とレックウザは「アウレント」の事を説明し始めた。

「今の所この世界ではアウレントの力はミウロ、君と光の国の王、ホウオウが持っているのだ。その力

は、神の言葉が聞け、過去の出来事もかわった場所とポケモンがいれば透視できるらしい、そして

そのポケモンだけが使える技…」

「なにになに！」

レックウザは言いかける、ミウロはわくわくと期待していたのだが、

「やっぱり言うのはやめておこう」

そう言われ、少しがつくりだった、けど自分にまさかそんな力があるとは知らなかった。

「でも、すごいな。お前」

リーフはうらましがらず、ミウロをほめるような感じで頭をなでてくる。

「僕も驚いた、まさか自分がそんな力を持っているなんてな」

エルも、こっちに歩きながら

「いいなーミウロ、そういう不思議な力があつて」

と両腕を頭に抱えて言う。

（「アウレント」・・・か！）

少し自信を持ったミウロはまだあやふやな思いで自分の水色の小さな手を見ると、ぎゅっとにぎった。

（かっこつけるな！）

濃ゆい霧がかかっている野原の真ん中に、所どころに青いダイヤモンドが埋めこめられている漆黒の色をした塔が野原にポツンと立っていた。

その塔の名は時の塔、今ではこの町の守り神となったポケモンディアルガが住んでいる。

「ここが、時の塔だ」

時の塔を確認しながらレックウザはゆっくりと降下する、そして地面が近くなるとミウロ達は一斉にレックウザの背から飛び降りた。

「これが時の塔なのかー」

場の空気とは違うミウロの反応。ほえーと霧がかっている時の塔を見上げる。

「とつとと、ディアルガを倒しましょうよ!」

ユーがミウロを乱暴にひっぱり、扉をバン!と勢いよく開け中に入っていく。

「我らも進もう」

「はい!」「」

レックウザ、エル、リーフも広い塔の中へ入って行った。
。

第二十二話 アウレント（後書き）

次もいくぞうー！

ミウロ・エル・ユー・レックウザ・リーフ」おーうー！..」

第二十三話 対決、闇のディアルガ！（前書き）

長いですよ。

ミウロ「なに、その忠告」

ま、いいじゃん。

じゃあ

スタート！！

第二十三話 対決、闇のディアルガ！

中は思いのほか明るかった。塔の外は霧だらけだが薄らと日が入っているのかもしれない。特にこれといったものはなく、ただ真ん中にらせん階段がドーンと立っているだけだった。

「我が先頭に立つ、君達はついてきてくれ」

「OK！」

レックウザの後、リーフがOKサインをしながらそう言った。

タン、タン、タン

リズムよく階段を一系列になって登っていく、レックウザは大きな体をよじらせながらミウロ達の前を飛んでいた。

「なあエル、闇のディアルガって強いと思う？」

足を踏み外すと危ないので前を向いたまま、緊迫した様子でミウロは言う。エルは「んー」と少し考えてから

「ディアルガといえば時の神だからね、どんな攻撃をしてくるかは分からないよ」

とさらりと言う。

「神?! 神と戦わなくちゃならないのか!?!」

それを聞きびっくり仰天、これじゃあ勝ち目はないかも知れない…

…。

言葉を失うミウロ。

「でも、大丈夫よ。神様のなポケモンならほら、ここにいるじゃない。」

とレックウザを指差すユー。そして上半身だけ後ろに振り向き、焦るレックウザ。

「我か?! まあ、確かに我は天空をつかさどる者だが……。闇のディアルガは正気を失っていると思うからなあ。我でも立ち打ちできないと思うが」

それに、ミウロが自信満々に言う。

「僕らも戦うから大丈夫だって!」

「あ、うちは戦わないから。バトルって野蛮でしょあまり好きじゃないのよねー」

とユーが気品の高いポケモンみたいに気取って付け加える。

(いや、性格の半分はほぼ野蛮だろ) ミウロ、心の中でのつつこみユーのはちゃめちゃ振りを知っているミウロとエルはどう見てもユーが野蛮にしか見えなかった。(特にミウロ)

さて、永遠と続くように見えるらせん階段はとうとう終わりを告げる。そうついに最上階に来てしまったのだ。

「もうだめだぁー」

ミウロは最上階にふらふらと登りつくや、ばたつと床に倒れる。

「わっ、ミウロ！」

こいつ（ミウロ）の体力なさには十分慣れているはずのエルは未だにミウロが倒れる事にびっくりしている。

「少し…休むわね」

ユーも疲れたのか、床にふかふかマットを敷き「ふう」と息をつきながらくつろぎ始めた。

「じゃ、オレもー！」

最後に登って来たリーフが元気よくユーのふかふかマットにダイブ！

「わっ、なによー！」

ドカ！

ユーはさつとマットごと横に交わり、リーフはそのまま床に激突する。

「いってえ　！」

「あんたが突然ダイブしてくるからこーなるの！」

ぺし

もう元気復活したユーがリーフのでこを迷惑そうに叩いた。「へー
い、ごめんなさい」と素直にリーフは謝り、

「はい、座ってどうぞ。」

とユーが敷き直したマットに座らせてもらつ。と、そこでエルが疲
れて寝てしまったミウロをかついで来た。

「オイラ達もいいかな？」

「いいわよ、別に」

けっこうあっさりと座らせてくれたユーにエルは「ありがとう」と
笑顔でお礼の言葉を

述べ、リーフの隣に座りミウロを横に寝かせる。マットはふかふか
でどうやら中に空気が

入っている様だった。

「あ、そうだ！お菓子食べようよ！」

「やったあー」

とエルの提案に嬉しそうに喜ぶリーフ。

「ちよつと待ってて」

居心地のいいマットに満足しながらエルはごそごそとバックから、

お菓子の袋を取り出

すとそれをパーティ開けにして、みんなが囲んで座っているマットの中心に置く。

お菓子はお馴染みポテトチップスだった。

「へー、じゃ遠慮なくいただくわね」

とユーが一つつまみ口に運ぶ、リーフはその「お菓子」をじーと警戒している様に睨んだ

後、おいしそうにもう二つつまむユーをみ、エルに聞く

「こ、これ食べても毒じゃないよな」

「うん、あたりまえさ。これけっこうおいしいんだよ」

と変に警戒しているリーフをおかしく思いながら、笑ってポテトチップスを食べてみせた。

モグモグ…ごくん

エルがポテトチップスを飲み込んだのをリーフはじっと見る。とてもおいしそうに食べている様に見えた。

「オレも、食べる!」

リーフは食べる気になったか、一枚小さめのをつかむとそろそろと口の前まで持ってくる。

「うゝゝ、えーい！」

パクッ

勇気？を出し食べた！その瞬間

「うめえー！！！」

初めて食べるポテトチップスしようゆ味に感激してしまった。そして残りをががつと手に取り食べ始める。

「ああ！うちのを取らないでよ！」

これでは、リーフに全部取られてしまう！とユーもポテトチップスをががつと食べ始める。

「仲良く食べようよー」

とエルは二ひきを制するが、リーフとユーは聞く耳持たずにががつと食べ続けあつという間に無くなってしまった。

そんなのん気すぎる集団を冷やかな目でみる者が二ひき。

「我らを完全に忘れているな……」

少し怒りのこもった声で言ったのはレックウザ。

「うむ、これでは物語が進まないではないか」

レックウザよりも大きな体をした普通のディアルガ、ではなく色が違う全身のラインは

オレンジ色で胸の結晶は青ではなく赤色になっている闇のディアルガはエル、ユー

達の行動に呆れて戦う事を忘れている。

呆れている伝説のポケモン達にきずいたエルが無邪気に手を振り、

「あつ、レックウザと闇のディアルガさんも食べる？もう一つポテトチップスがあつたんだ」

と言う。これにはさすがに闇のディアルガはキレてしまつて

「おーまーえーらあああ」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

と怒り爆発十秒前。

「やばっ」

リーフ、エルは慌ててマットを出ると戦闘態勢にレックウザもミウロを起こすと背中に

乗せ戦闘態勢になる、そして筒抜けの霧のかかった空が丸見えの中緊張感ゼロの中ディア

ルガとのバトルが始まつた……。

「黙つてみていれば、オレ様を無視しやがってー！」

キャラ崩壊してしまった怒り狂っている闇のディアルガは『はどうだん』を繰り返す。

シユウ

と赤い玉が胸にある結晶の前でできたと思うとそれは一直線にエルの元へ放たれる！

「っ！」

バトルの時は、ときたまだけど勇敢に戦えるエル。さっと素早く玉を避けると、走りながらギザギザのしっぽを白く光らせ、技の名前を叫ぶ。

「『アイアンテール』だあ」

しっぽが当たる様にくるつと体をねじり、ディアルガの足に『アイアンテール』！

バッシイン

『アイアンテール』は力強くディアルガの足にクリーンヒット！

「ぐっ、」

ディアルガは少しよろめき倒れそうになるが体制を慌てて立て直す。

（なかなかやるではないか）

闇のディアルガは、久々に来た強者に手ごたえを感じていた。しか

しそれは闇のディアルガをもっと狂わせ強くさせるパワーになってしまっていたのだ。

「お前らは死ぬまで戦ってもらうぞ!」

闇のディアルガは完全に正気を失い、がむしゃらに『はどうだん』を次々と打ってくる。

「ぎゃああああ!」

リーフは頭を抱えて逃げまとう、しかし『はどうだん』は容赦なくリーフの体に当たって

は消えていく、「うぐっ」リーフは顔をゆがめ苦しそうだ。エルもなんとかぎりぎりですべて

けきっている。

「どうすれば…、あつそうだ!」

レックウザの背に乗って逃げていたミウロは何か思いついたようだ、さっそく下に降下してと頼む。

「ああ、いいだろう」

レックウザは冷静にそして器用に玉を避けながら下へさがりリーフの近くに来る。

「助けてくれえ」

半泣きになったリーフが一目さんに飛び乗ってきて、その次エルも「ひえー」と言いながらレックウザに飛び乗る。

「そうだ！ユーは…」「ここよ」

またもやミウロの言いかけた言葉にすぐ近くでしたユーの声が重なる。「へ？」ミウロは

自分の後ろで聞こえたユーの声の方に振り向くと、いつの間に乗っていたのだろうか、そ

こにはユーがいた。

「いつの間に?!」

エルとリーフが驚いた声を上げる。ユーは

「へへーん」

と、得意顔。

しかしそんな暇はない、こうしている間にもレックウザは『はどうだん』を懸命によけているのだ。

「はあ、はあ早くこの対策を考えてくれないか？」

息を切らせながらレックウザが言った。ミウロは「うん」と頷くと、

「行ってくる!」

そう言っ対策なしにレックウザ乗せから飛び降りる。

「オイラも、行くよ！」

今日は格段と調子がいいエルは普段は絶対無理な戦いに挑むため、ミウロの後を追う。

「オレだって行くぞ！」

リーフも下に降りた二ひきを追って下に降りて行った、それを見ていたユーはあきれ顔。

「作戦もなしに突っ込んで行くなんてばかでしょ」

とまあ、こんな感じで空から観戦していた。

「ユーという者、我も戦いに参戦しようと思うのだがいいか？」
レックウザが一匹だけ乗っているユーに聞くと

「あんたは後から、ピンチに現れる救世主的な感じで、ね」

少しだけ怖い返し方をされる。さすがのレックウザもおじたらえ「そ、そう、だな」と取りあえず今は三対一のバトルを見守ることになった。

「おつりゃああ！」

ドンッ

『とっしん』で高く跳ねあがったミウロは見事闇のディアルガの腹辺りに思いつきり突撃

した。しかし、闇のディアルガは防御も上がっておりエルが攻撃した時とは訳が違う。ダ

メージは全くといっていいほど受けていなかった。

「接近肉弾戦か？ふっ面白いな、オレ様がこんな攻撃ごときで倒れると思うのか？」
と微笑する。

「だまれえー！次はオレだああ！えいつ『リーフブレード』！」

リーフは闇のディアルガに向って走り、近くに来ると葉っぱのしっぽを緑に光らせ、ディアルガの足をガシィン！と切り裂く！

「ふん。きくわけがないだろう！」
と言っている闇のディアルガは、「グオオオオ！」と空を切り裂くような叫びを上げると鋭い長細いひし形の物が何個か付いている尾にパワーをためる。

「ミウロ達が危ない！」

ディアルガだけが持つ特別な技に危険を感じたレックウザは地面にすごいスピードでせま

りながら威力の強い『きあいだま』を出すために体全体にパワーを貯める。

それと同時にレックウザの体も明るい茶色に薄く光り始めた。

ディアルガの尾にはちやくちやくとパワーがたまり、尾は銀色の光を強める。

「おい、なんかやばそうだぜ」

リーフが早口でミウロに言う。ミウロも分かっているとわんばかりにうなずくと

「僕にいい考えがあるんだ」

と自信のある目で思いついた作戦を早口で伝え、三びきは正面を向き、闇のディアルガが技を打つ瞬間を狙う。

「くらええええ！」

瞬時ディアルガがそう叫び、破壊力抜群の技『ときのほうこう』を真つすぐミウロ達に向つて放つ時！

「いまだ！『あまごい』！」「『かみなり』！」「『てだすけ』だ」

と三びきがそれぞれの技を出す、『あまごい』はミウロですぐ雲が曇り始め、エルの繰り

出した『かみなり』にリーフがパワーを送る、そして絶対当たる様になった『かみなり』

は闇のディアルガに見事的中した！

「闇のディアルガ、覚悟！」「くらいなさーい」
その時、この声と一緒にレックウザの出した技、『きあいだま』と
ユーの放った『ソーラービーム』が弱った闇のディアルガに止めを
さした！

「グオオオオオ……ン」

闇のディアルガは一声そう鳴くとばたと倒れた。

「……やったああ！」「……」

三びきは嬉しさで跳ねあがる、でも慢心しちゃいけない倒せたのは
みんなで力を合わせたからだ。

レックウザも静かに空から降りてきてユーを降ろす。

「ナイスよ！あんたたち」

とユーは褒めたのだろうか、グッドサインをしながら笑った。

「うん、ユーも協力ありがとね」

それをエルが返すようにグットサインをして笑う。

それから、三十分後。。

「うう、ここはどこなのだ？」

もう体の色も元の色になり、正気に戻ったディアルガは目を覚ます。

「ここは、時の塔だけど」

何とも言えないミウロのなれなれしさを感じながらディアルガ大きな体を起こすと口を開く、

「ああ、そうだったな。我を失っていたオレを助けてくれ本当にありがとう」

もう正気に戻っていたようで、立ちあがると空へ舞う。

「オレはもうこの町を出て行くが、一つ感じた事があったから言っておこう。良く聞くんだぞ」

「はい」とミウロが気を引き締めた様子で頷く。

「もうすぐ、光の者が目覚めるだろう、それと同時に悪の者も目覚める。この事をしっかり胸に刻んでおいておけよ。」

ディアルガはそれだけ言い残すと高い高い空へ昇って行きやがて消えた。

「「「はい!」「」」

エル、ミウロ、ユーと一緒に返事した。きっと自分の事かも知れないと思ってしまったからだ。それにディアルガは三びきに向って言ったというのもあった。

そんな訳で、一行もレックウザの背に乗り吹き抜けの天井から飛び出す。

外を見た瞬間、ミウロとエルとユーそれにリーフはその美しい生き
生きとした風景に少し
だけ感動してしまった。

「わああ！」

とエルが思わず声を漏らす。

青空が広がる中、緑や山が青々と茂っていて、川もすっかり行きか
えり、涼しそうで透

き通った水や魚達が気持ちよさそうに泳いでいく。そして、その異
変にきずいたか、町民

達が一人、また一人と家から出てきて、その内町の者全員が家から
でて、大きな感動と嬉

しさを感じていた。見ているの中には嬉し涙を流す者もいる。

すると、ある一匹がレックウザ（ミウロ達）を見つけたまた大騒ぎに
なる。この町には元々

レックウザがこの町を見守っているといわれていたからだ。でも、
普段はレックウザの

姿や塔は見えないから半分以上は信じていなかった、中には絶対い
るわけがない！と言

っていた者もいた。しかし今はもう町民みんなが信じている。

その時、

「レックザばんざーい！」

と誰かの声が町から聞こえるとその声はどんどん大きくなり町全体が「レックウザ、ばんざーいー！」

と大反響の渦になった。そして、それが終わるとパチパチパチとたくさんの拍手が起こる。

「なんだか、照れ臭いね」

エルが笑ってその情景を眺める。

「うん。それにしてもどうしてディアルガがああ塔にいたんだろうなー」

とミウロが首をかしげた。

「ま、今はいいじゃないか。こうして町が無事に元に戻ったんだしな」

リーフは拍手が起こっている下に調子に乗っているのか手を振る。

「君ら、ちょっといいか、少しあいさつ代わりに宙返りしたいのだから」

レックウザは顔を真っ赤にして嬉しそうにミウロ達のほうをちらと向きながら言う。

よかったな、レックウザ。

ミウロは暖かな気持ちと祝福の気持ちいっぱい

「いいよ！」

と自分がこういうのがニガテなのも忘れて笑顔で言ったのだった。

それから・・・どうなったかはご想像でおねがいするが、このあとこの町、ヒルタウンは、

緑と水の小京都

と呼ばれるようになり、観光客もたくさん来るようになった。

その賑やかな町に成長したヒルタウンを見守る存在、そして時たま町民を助ける存在、レックウザが塔で暖かく見守っていた。

そしてミウロ達は、ディアルガの言葉をきっかけに新たな旅へと一歩踏み出すことになったのだった。

続く！！！！

第二十四話 テーマル国へ！（前書き）

こっちのんびりすぎ・・・。

ミウロ「なにしてんだか」

すまねえです！

第二十四話 テーマル国へ！

真つ暗な暗闇の中、何も見えないところで誰かが悔しそうな声を漏らした。

『闇のディアルガが倒されたか、おのれゝあいつら』

目だけが赤く暗闇のなか不気味に光っていた。

闇のディアルガを倒し、ヒルタウンの復活した姿を見た後の話

空は赤く染まり、太陽も山のほうへ沈みかけている。町のポケモン達も家に帰り夕飯のしたくをしているところ…、ミウロ達一行はレックウザの塔に泊まらせてもらっていた。

ヤミ、ヤミ。カラス、ではなくヤミカラスの大群が空を泳いでいる、

どこに行くんだろうな……

ミウロはひとり最上階で寝転がり、ヤミカラスが通過中の空を見ていた。少し前にここで

闇のディアルガと戦ったのが嘘の様に周りは一瞬としている。

「ふああああ、でもなんで闇のディアルガがこんな所にいなくちゃいけなかったんだろ。時の神は関係ないよな、レンア国のたくら

みかあ？」

寝むそうにぶつぶつと考え、ことをしていると、誰かがらせん階段を上って来た。

「ミウロー、そんなどこにいつまでもいると風邪ひいちゃうよ。」
と言って、登って来たのはエル。今までは下の階で料理の手伝いをしていたが、ドジばかり

り発揮するのでユーに「あんたは、ミウローを呼びに行きなさい!!」と叱られ呼びに来た

のだ。

「そうだな、じゃあついでに下で日記でも書くか。」

ミウローは伸びをしながら起き上る。

「ついでにつて何さ。」

エルが苦笑する、そして二ひきで一緒に下へおりて行った。

二階の部屋、ここには遙か昔レックウザと共にすんでいたポケモンが使っていた部屋だ。

この部屋にはキッチンや風呂、ベットなどがあり、長い月日がたっているのにもかかわら

ずまだ使えていた。

そういつわけでミウロたちはこの部屋に泊めてもらっている。

ガチャ「ただいまー」

ミウロ、エルがへやに入って来た。部屋では、リーフとユーがテーブルに出来上がった料理を並べている。ユーは二ひきが入ってくる
と、「さつさと席につく！」と言う。

「へいへい」と

ミウロがしぶしぶ席に座る、自分の前に並べられている料理を見て
少し気が引けてしまっ

た。その料理とは、見た目からしてくそまずそうなドロドロとした
コーンスープ的な物（で

も色は泥のような茶色）と焦げてる焼きごはんだった。

「うっ、これいったい何入れたんだあー」

ミウロは顔をゆがめてスープの入った皿を指差す。

「ああ、これ？なんかそこらへんに生えてたコケと変な植物を入れたのよ」

ユーはまるで当たり前みたいなフツの顔で言う。その言葉で、エルとミウロの顔はますますゆがみ、

「しっ死なせる気かあー！」

とミウロはスープの入った皿を窓から捨てようと、席から勢いよく立つ。その隣でリーフがそのスープを一口する。すると思いがけない感想が出てきた。

「！、けっこうおいしいぞ」

「こんなドロドロしたくそまずそーなスープが?!」

ミウロはついどさくさまぎれにスーパの悪口を言ってしまった。シ
ユウウ ミウロの後ろでユーがエナジーボールを・・・

「あんたはこれでもくらっときなさい!!」

と発射される!どがつ、後ろからもろに攻撃を受けてしまったミウ
ロ、

「すみませーん」

ドタ、とそれだけ言うのと倒れてしまった、こうかばつぐんでひん死
状態になっている。

「おい、ミウロ。大丈夫かよ!!」

リーフがすぐに倒れたミウロの肩をゆする、返事はもちろんない。
エルなんか初めてミウ

ロがひん死してしまったので、もう泣いていてミウロに何度も声を
かける。

「ミウロー、死なないでよ」

「ふっ。おおげさだな。」

レックウザは「ふっかつそう」を柵から持ってきてミウロの口に無理矢理入れる。すると、ミウロの顔はたちまち悪夢にうなされているような顔になり、

「につにがい」

と飛び起きた。エルは「よかったあー」とミウロに抱きつく。

「なんだよ、エル」

ミウロはなぜか突然だきついてきたエルにびっくりしていた。

「ははははー!」

部屋中にみんなの笑い声がとびかったのだった。

そして、その夜……。ミウロは夢の中で、真っ白な空間をどこまでも歩いていった。

（こんな事前にもあったような）と思いながら。

しばらく歩いているとパツと周りが緑の丘になった、風がそよそよと吹いていてミウロの体をなで過ぎ去っていく。

「やっぱ、前にもあったなー。……。あっ思い出した!アルセウスだ、ここでアルセウスにあったんだった!」

ミウロは一人で納得していると、丘の中央にひとつの大きな光が現れた。

「やっと、思い出してくれたな。ミウロ」

優しく暖かなでもしつかりとした声がした。

光は消え、そこにいたのは、長らくミウロの記憶から抜けていたあの懐かしいアルセウスだった。

「ひさしぶりだな、アルセウス」

相変わらずのミウロはさっぱりとした笑顔をみせた。

「ああ、どうやら自分の力を知ったようだな？」

アルセウスにはすべてお見通しなのだろうか、まるでその事を知っているような口調だった。

「うん、「アウレント」っていう力なんだよな。で、聞きたいことがあるんだ」

ミウロは今日の夕方考えていた、闇のディアルガのことを聞くところ返って来た。

「闇のディアルガは、元は普通の時をつかさどる神だった。しかし、不思議な力を持つグライオンに闇のディアルガにされてしまったのだ。」

「そのグライオンって」

「そうだ。レックウザをウロコに変え、遺跡に閉じ込めた張本人だ。」

アルセウスの目は真剣にミウロのほうへ向けられ、そして続ける。

「レンア国は実はヒルタウンから侵略に入ろうとして、そのため

にはまず闇のディアル

ガがこの町を沈めさせねばならなかったのだ。だから、闇のディアルガが守り神に着いた

時、あの町は活気を失っていたのかもしれない。」

少し興奮しながらミウロが言う。

「でも、僕たちが闇のディアルガを倒したからもうそれはできない
つてことだよね！」

「うむ、今のところは安心だ。」

「良かったあ。」

それを聞き、ミウロはホッと安心する。力が抜けたような感じだ、
ずっとそれが気にな

っていたからだろう。ミウロそのホッとした表情を見てアルセウス
も安心していた。そ

して、海が見える後ろを向くとそのまま言う。

「最後にディアルガの言っていた言葉、忘れるではないぞ。」

「もちろん！」

ミウロが大きく頷く。そして、アルセウスは

「久しぶりに会えて良かった。旅の健闘を祈るぞ」

海を見たまま言うと、眩しく光りだし消えた。ミウロもそこで目が

覚めてしまった。

きずけばもう朝でエル、ユー、リーフ、レックウザはもう先に朝ご飯を食べていた。

「ふあああ。」

あくびをした後、みんなより遅れて四角いテーブルの空いている一番端っこの席に着く。

「おはよう、ミウロ」

エルがパンをほおばりながら挨拶してきた。

「おはよー。エル」

ミウロも挨拶すると「いただきます。」と手を合わせ、パンを手にとった。

「みんな、聞いてくれよ。僕さ、夢でアルセウスに会ったんだ。」

「ほお、そうか。それでどんな話をしたんだ？」

一番興味を持ってくれたのは座らず浮いて食べていたレックウザ、興味深そうに聞いてきた。

「オイラも聞きたい！」

エルも興味を示してくれ、ミウロはハッピーニュースとして嬉しうに、聞かれた事は説明もしながら話した。

話終わるとレックウザはもうニコニコだった。

「そうかー、それはよかった。よかったら、次に行く国まで送ってやろうか？」

ともうこんな感じでご機嫌モードになっている。

ユーは（「くろろ。ミウロ」）と思いながらレックウザに

「じゃあ、お願いね！」

と今のうちちゃっかりお願いした。

それから、レックウザの背に乗ってミウロ達は塔を出発する。次の国はもう決まっている「テーマル国」だ。

リーフはさわやかな風に気持ちよさそうにあおられながら下の風景を眺める。下は一面山ばかりだったがリーフの上機嫌は変わらない。

「やっぱ空の上ってサイコー！」

「あーいいわね、リーフは気楽で。うちなんかもうだるいし。はやく着かないかしら」

ユーといえはついさっきまで元気だったのだが、レックウザに乗り

塔を出た瞬間こうなっていた。

ミウロはなぜかニヤとしてしまう。

「きつと、罰だな」

「はは、たぶんね。」

エルは苦笑してする、ミウロとエルは気楽に話していると、ふいにレックウザが

「もうすぐテーマル国だぞ！」

少し先にあるジャングルのようなものを見つける。テーマル国の入口はジャングルで、しかもそれは何十キロも続いているのだ。まあそんな事はミウロ達は当然知らないのだが。

ジャングルの入口まで来るとレックウザはゆっくりと降下する、そしてミウロ達を降ろす

と「では、気をつけていくんだぞ」そう言ってまた空へ飛び立っていった。

入口には『ここからテーマル国』と看板が立てられていて、ミウロの冒険心をくすぐった、

また新しい冒険が始まるのだ。そう思うとドキドキしてくる。

「頑張るぞ　！」

ミウロは高ぶる気持ちを抑えきれず、手を上げ張り切った様子でそう言ってしまう。

「おー!!」

リーフ、エルものつてくれ手を上げた、ユーだけはまあいつものように軽く流す。

「はいはいっと、さっさと行くわよ。」

ミウロのリュックを後ろからひっぱるとずるとそのまま引つ張っていく。

「うわわ、離せよ。」

ミウロは抵抗するが無駄でそのままずると引きずられていくだけだった。

この後、食料がなくなり突然のサバイバルが始まるのだった。

続く

第二十五話 みんなでサバイバル！？ 前編

「はあ、どうしよう。食料がもうないわ。」

ユーが全員のバックの中を見た後、ため息混じりでつぶやいた。今は昼ごろでもうそろそ

ろご飯にしようとなったのだが、食料が無くなってミウロ達はいきなりピンチにおちいつていつていた所だ。

「このジャングルって、出るのに十日はかかるらしいよ?！」

エルがいつの間にか買ったのか、テーマル国の歩き方と言うハンドブックを見ながらすっとんきょうな声をあげた。

「いつの間にか買ってたんだ?！」

リーフは出るのに十日はかかるというよりもエルがいつの間にかその本を買っていたことに驚く。エルは照れ臭そうに頭をかきながら言う。

「いやあー、塔を出る前本屋さんによって買ってきてたんだー。」

「え?! いつだって! 塔を出る前?! そっぴやエルが見当たらないかったときってあったような・・・」

ミウロが半分独り言を言っている、ゴロゴロゴロゴ、と雷の音がした。

「ふえ？」

変な声をあげ、空を見上げるとさっきまで晴れていた空はどこにも見当たらず、どんよりとした雲が覆っていたのだ。しかも今にも降り出しそうだった。

「うわー、どうしよう……。 」

エルも空を見上げて困った顔をした、ホント、今日はついていない。食料がないあげく、雷が鳴って雨が降ってきそうだからだ。

「とにかく！今のうちに雨宿りできる場所探すわよ！」
ユーがリーダーシップを取り、落ち込んだ空気を割ってくれた。

「よし、それなら僕が探してくるよ！」

ミウロも気分を切り替え、ジャングルの奥地へと走り出す。エルも「オイラも行くよ。」とついて来てくれた。

「たのむわよー！」「オレたちは食料を集めておくから見つけたらここにきてくれよなあー！」

ミウロとエルの後ろ姿にリーフとユーが言った。

「分かった！」

ミウロは走りながら返事をかえす、後にはリーフ、ユーが残った。

「さてと、いい食材を探すわよ」
「おーうっ！」

この二ひきもやる気満々に草の茂みへと入って行ったのだった。

ポツポツと小雨が降りだす中、ミウロとエルは静かなジャングルの道を歩いていった。道

といっても途中からは道という道は無くなり、茂みの中をかき分けて行かなくてはならな

かった。

「あーあ、ここら辺に誰か住んでないのかな」

とミウロは自分の背丈くらいの草を払い、エルは「テーマル国の歩き方」の本を開き読み上げる。

「えーと、「元々は水タイプと草タイプの種族がいたそうですが、今は一匹もポケモンは

住んでないそうです。でも毒虫などはいるのでしっかり準備して行きましょう」か。オイ

ラ達全然準備してなかったね。」

そして、またバックの中に本を戻す。

「誰も住んでいないのか！まいったなあー。」

がつくし、ミウロは頭を下げた。するとエルが横に何かを見つけ、嬉しそうに言う。

「ん？あそこにほら穴があるよ！」
「どこ？」

場所が分からないミウロにエルが「こつちだよ。」とその草の茂みの中を案内する。茂

みの中に現れたのは、雨宿りには丁度いいほら穴だった。二ひきは中に入る。少し先は

行き止まりで、横にも奥行きがありけっこつ広い。ミウロはぐるっと一回りすると

「エル、こんないいところ見つかるなんてすごいよ。」

と褒める。エルは照れ臭そうに頭をかいた。

「へへっ、偶然だよ。場所も決まったことだしさ、待ち合わせの場所に行こう」

「そうだな！」

二ひきは荷物を入口の近くに置くと元来た道に戻って行った。

集合場所には、わずかに十分で戻れた。リーフとユーの姿は見当たらない、きつとまだ食料探しなのだろう。

「まだかなー。」

エルが暇そうにつぶやいていると、ガサガサとたくさん木の葉が入った袋をかついだリーフが慌ただしく草の茂みから出てきた。

「ミウロ、エル大変だ！ユーが熱を出した！」

ユーが熱！？だから「だるい」とか言っていたのか……。ミウロは、リーフが口でくわえてきたユーの額に手をあてた。

「熱い！」

熱いと言ってしまつほどユーには熱があつた。たぶん38度くらいだろう。

（こうしちゃいられない、早くほら穴に連れて行かないと）そう思つてミウロはユーを抱きかかえる。

「ほら穴に早く運ばう！」

「うん」

そして、三びきは基地となつたほら穴へ急ぎ足でかけて行つた。

ほら穴につくや、ユーに毛布をかけ寝かせてあげた。

「うつつ。」

ユーは薄い意識の中うめき声を上げた。外では近くで雷が鳴り響いていて大雨になっていた、暗く湿つた地べたにミウロ、エル、リーフはひとまず座る。

グーキュルル

誰かの腹の虫がなった。

「ふう、はらへったあー。」

ミウロがばたと倒れる、腹の虫がなったのはミウロのようだ。

「ミウロが倒れちまったし、木の実食べようぜー。」

リーフが袋から大量の木の実を出す、木の実は山のようにたくさんあった。ミウロはその山のようにある木の実にきずく。

「いただきますーす！」

そう言ってパクパクと食べ始めた。二ひきは顔を見合わせ、食べ始める。

「ユーにはどうやって食べさせる？」

と木の実をかじっているエルがリーフに聞く。

「自力で食うんじゃない？あいつのことだし。」

リーフ、ほぼ無関心。

ミウロはユーを見る、やっぱり苦しそうだ、うめき声をあげながら寝ている。

（なんとかしないと……。そうだ！）

「なあエル、リーフ、薬草探しに行こうよー！」

とミウロが言う。

「あっそれいい！」

エルも顔を輝かせて言う。

「それじゃあ、さっそく探しに行こうぜ！」

リーフが「おー！」と手を上に上げる。そこでミウロはきずいた。

「今、大雨だけど？」

「・・・・あ、そうでした。」

こんなんで大丈夫なのか？！

続く

第二十六話 みんなでサバイバル！？ 中編

翌朝ミウロ、リーフ、エルは薬草探しに出かけていた。道なき道を進みながら薬草を探していると突如エルの姿が消えた。

「エルがいないぞ！」

その事に最初に気がついたのはリーフ。「何？」ミウロはキョトンとして後ろ、リーフ

のほうを振り向く、さっきまでしゃがんで薬草を探していたエルが見当たらないではない

か！

「本当だ。今はともかくエルを探そう！」

ミウロはなるべく冷静に言うが、

「ヤベっー！早く行くぞ、ミウロ！」

リーフは半分パニックになっていて、目がグルグルになりながらミウロの手を引き走り出す。

そのころ、エルは……………

不気味なジャングルの中を歩きさ迷っていた。何かいるというわけでもないが背筋がゾツとする怖さをかんじていた。

「ここ、どこなんだろう」

いつの間にかはぐれてしまったミウロとリーフの姿はどこにも見えず薄暗いジャングル

の道が続いているだけだ、エルの手持っている袋にはたくさんの薬草と木の実が入っていて

少し重かった。

「とりあえず元来た道をもどろつかない。」

エルは進むのをやめ、おそらく歩いてきた道を後戻りし始める。とその時！

「その袋をよこせ！」

と後ろ声が聞こえた。現れたのは頭に黒のバンダナをまいたストライクと、その部下と思われる青バンダナを腕に巻いたブイゼルだった。そのストライクが言う。

「オレ達はこのテーマル国を旅する盗賊だ。その袋には薬草やらが入っているんだろう？」

エルはおびえてただこくこくと頷く、するとストライクは「やつぱりな！」と突然すごいスピードで襲って来たのだ！

「っ！」

もう足がすくんで動けないエルはギュッと目をつぶった。（どうしてこういう時に勇気が出ないんだろう！）と後悔しながら。

「おりゃあああ！」

と声が聞こえたと思うと、ミウロが右の茂みから飛び出してきてストライクを弾き飛ばした！！

「ミウロ！」

エルは嬉しそうに叫ぶ、ミウロは「よかった。間に合ったー」と額の汗をぬぐった。

「お前ら、なんなんだよ！」

リーフも来て体制を低くしストライク達に向って威嚇する。そして、ミウロもストライク達を睨みつける。

仲間がいると心強いんだ……！

一人の時は怖かったけど、ミウロ達が一緒だと勇気がわいてくる！

エルもストライク達にバチバチとほっぺの電気袋から電気を出すと、ストライク達は「ひっ、ひえ〜」と声を合わせ逃げて行った。

「戦わないで勝っちゃったな、はははっ」

案外弱すぎた盗賊達にミウロが笑う、それにつられてリーフとエルも笑った。そのあと、ユーの待つ祠へ戻ると、

「あんたたちどこ行ってたのよ！」

復活した元気のいいユーが少し怒り気味で待っていたのだ。

「熱は?!もう大丈夫なのか?!」

ミウロはびっくりしてピンピンしているユーに聞く。とユーは「はあ?」と

「何言ってるの?うちはこのとおり元気百倍よ!」

と片手を上げる。

(今までの、きつそうに寝ていたユーはなんだったんだ?!)ミウロはそんな気持ちになりながらユー

のために取って来ていた薬草をだす。

「これさ、ユーのために取って来たん「いいわね、その薬草。うちがおいしく料理してあげる。」

「ええ!」

ミウロが言い終わらない内にユーはその薬草をさつと取り、キャンブによくあるミニ鍋にと入れた。その様子を三びきがあんぐりと口を開けて見守る。

「なにか、ふ・ま・んでも?」

と恐ろしい笑顔を浮かべるユー、最近性格が倍に凶暴化している所をまのあたりにしているミウロたちだった。

そして、夜は明け太陽が東の空からのぼってくる。その日が朝もやのかかっているジャングルを暖かく照らしていく。

ミウロ達はその靄の中、ほら穴を出発した。まだちゃんとした道はなく茂みをかき分けて進む。

「どうやったら、このジャングルを抜け出せるんだろうな？」

と先頭を歩くミウロが言うと、エルは「テール国の歩き方」の本（地図）を取りだす。

「ジャングルは東に進んで行くと出れます」って書いてるよ。」

すると、リーフがパツとミウロを急ぎ足で追い越した。

「よし！さっさとこのジャングルを抜け出そうぜ！」

待ちきれない様な感じで後ろを振り向き言うと、一人でどんどん走っていく。

「この、せかつちー！」

ミウロとエルが走るのはうんざりだと思いながらもリーフを追いかける。ユーも肩をすくめ三びきを追

いかけたのだった。

第二十七話 みんなでサバイバル!? 後編

数日後 。 現在、ミウロ達はジャングル東部を通過中。

まあ簡単にいつてみれば、もうすぐ出口が近い。作者のほうはなんかぼサバイバルではなくってきている気が……。 (ごめんない！)

では、スタート！

無言でただひたすらにジャングルを進む、みんなの額にはすでに汗が噴き出ていた。

今日でこのジャングルにいるのは七日目、拾っていた食料は底をついたところ。

ミウロが倒れたい気持ちを我慢してただ足を前に進めている時だった。なんと四匹の目の前に現れたのは、浅い川。

「なんか、川多くねえ？」

リーフがふと呟いた。確かにそうかもしれないがまあいいではないか！と作者は立ち直る。

「まあ、いいじゃない。丁度暑かったしね。」

ユーはせっせと浅い川に入る、でも、ユーには少し深くやっとな顔が出るくらいだった。

それでも、「はぁーいい気持ち」とプール気分で体を伸ばしてい

る。

「僕も入る！」

ミウロはたまらなくなり、ばしゃんと飛び込んだ。水は冷たくて気持ちがいい。暑い日にはもってこいだ。

「みんなも来いよ。」

岸でボーとしているエル達に手を振るとリーフが助走をつけながら

「おーし、じゃあ行くぜ！」

そう言うて川に飛び込んだ！といつてもリーフには足ぐらいの水域であまり水しぶきが上がらなかったが。

それに続きエルも入る、体の四分の一くらいが水につかった。

「ううー。冷たい」

ちよつと凍えながら三びきの所へ歩いてくる。

エルが来て、熱帯特有の細い木が立ち並ぶ川をあるきだす。

「ふ 気持ちいい。」

リーフが気持ちよさそうな表情を浮かべて一歩踏み出したその時！

ズズズズズズ
・
・
・
・
・

なんとリーフの体が水の中に沈み始めたのだ！

「ん？しっ沈む？！」

突然現実に戻されたリーフは、慌ててじたばたともがくが体はその度に沈んでいく。

「リーフ！」

ミウロが手を伸ばす、リーフはやっとのことで手をつないだ。

「まったく、あんたってやつは」

「いてえ。」

ユーは沈みかけて体の半分以上水につかっているリーフのしっぱを引っ張る。

「オイラも！」

とエルはミウロの後ろから体にしがみつき体重をかけるのだが、その重みが逆効果になりリーフはどんどん沈んでいく！

「くそー！」

リーフは歯を食いしばり抵抗するがダメだった。

「うつつ」

ミウロがうめき声を上げる、きっと体力が限界なのかもしれない。エルが感ずいてミウロの足元を見るといつの間にか腹の辺りまで沈んでいたのだ。

（どうしよう……このままじゃ）

エルは不安になりぎゅっと目をつぶった。

ミウロはもう顔まで沈んでしまったリーフに声をかけてみた。

「おいっ、大丈夫か。リーフ！」

「・・・・・・・・。」

やっぱり無理だった。第一、顔が沈んでいるのに声が出るはずがない。

ミウロの方ももう首まで沈んでいた。

こうなったら・・・・、一か八かでかけるしかない！

そう決心し、もう土まみれになってしまった首辺りに片手をやるとグツと手をにぎった。

そしてエルとユーに声をかける。

「なあ、エル。ユー」

「何？」「こんな時になによ」

エルは目をゆっくり開ける。ユーは焦るように早口で言った。

それぞれの反応にミウロはふーと息をつき続ける。

「ふたりは離れててくれないか？」

「「?!」」

二ひきは少し戸惑ったが、ゆっくりと体をミウロ、リーフから離れた。

「なにか、考えがあるんでしょ？」

岸にあがったユーの問いにミウロは顔をあげ、「もちろん！」と笑った。

ズズズズ

いつの間にかリーフの体が完全に沈み、あとにはまきあがった泥が浮かんでいた。

ミウロの顔に真剣な表情が戻る、顔といっても半分は沈んでいるのだが。

（せーの！）

自分でかけ声をつけると、バシャアンと川へ自分から潜ったのだ！

「ええ！ミウロ？！」

ユーのとなりで岸に座っていたエルはミウロの思いがけない行動に驚き、つい追いかけようと立ちあがってしまった。

「だいじょうぶよ、あいつは。」

とユーはエルの腕をつかみ言った。

こんな事が前にもあったと思いながらエルは「うん！」と明るく返事をしてまた座りな

おしたのだった。

川の中は底なしだったので中は深く泳げていた。でも泥ばかりで視界が悪い。ミウロは得意の泳ぎで深く潜っていつていた。

リーフは思ったよりも深く沈んでしまったようだ。ミウロは少し焦りながら沈むように力を入れ、泳いでいく。

「あれは！」

あと数メートルだろうか浮かんでいるリーフを発見した！

一気にペースを上げて進み、リーフの所へつく。

「リーフ？」

声をかけるとリーフは薄目を開け、コクンとゆっくりうなずいた。

「よかったー生きてたんだな。よし、今助けるからな」

ホッとしたミウロはとりあえず、まだ意識のあるリーフを横に抱え、今度は水面目指してあがっていく。

（あともうちよつと、あともうちよつとだ！）

焦る気持ちをおさえながらそう自分に言い聞かせながら急いでいると視界がバツと暗くなった。

「うつ……。」

何が起こったか分からないまま、突然の痛さがミウロの体全体にはしる。

そして、ミウロはリーフを抱えたまま苦しそうに深い深い川の中へ沈んで行ったのだった。

ミウロは目を覚まし体を起こした。周りはなんと、元いたジャングルだったのだ。

「戻って来たのか？」

隣にはリーフが横たわっている、取りあえずエルとユーを探そうと立ち上がると

「ミウロー！、リーフ！」

ユーとエルが向こうの岸边から駆けてきた。

「無事だったんだねー。」

エルは二ひきの所につくや、ボロボロと涙を流す。ユーは少し怒り気味な様子できつく言った。

「あんたねえ、後先考えてなさすぎよ。川のもつと深い所に沈んで行ったあと覚えてるの？」

・
・
・
・
記憶にない。

「いや？ ぜんぜん。」

すっかり忘れていたミウロにユーはハア―とため息をついた。

「うちがわざわざ助けてやったのよ。」

「へえーありがとう。つてええええええええ！！！」

ミウロは驚いて腰を抜かしてしまった。

「泳ぎが得意なのはあんただけじゃないんだからね。」

ユーはふふつと笑った。すると、リーフが目をこすりながらおきあがった。

「あ、あれ？こっちは？」

寝ぼけなまこのリーフにエルが教える。

「リーフ。良かったー、ケガはないよね。あつここは元のジャング
ルだよ。」

「そうかー。はあ、良かったあー」

リーフはばたとまた倒れ、空を見上げた。空はもう赤みがさして夕日が雲を照らしていた。

「腹減ったなー。」

ミウロもばたとリーフの横に倒れる。そしてグーと腹の虫がなった。

「今夜のご飯どうしようか？」

エルも草の茂みに寄りかかりいつの間にかご飯係になっているユーに聞く。

「うちがそこらへんの草やキノコでおいしい料理を作ってあげるわよ」

「え。そんなの食べても大丈夫、だよな？」

血の気が引いているエル、ユーはエルを睨むところ言った。

「じゃあ、あんたは夕食抜き！」

当然エルもおなかは減っている。夕食抜きなど耐えられないのだ。

「それはいやだよー。」

必死にユーにしがみついているとリーフが「何の話だよ！」と首を突っ込んできた。

「あ、もしかして晩飯の話か?!」

さすがリーフの感、大当たりだ。

「そうよ。今晚もおいしい料理を作っ
てあげるから、オーホッホッ
ホ」

ユーが高笑いしている中、リーフは

「マジか！よっしゃあー！」

と跳ねながら大喜びしていた。そしてミウロも来る。

「で夕食のメニューはなんだ？」

期待している分けでもないが取りあえず聞いてみると、ユーは胸をはって自信げに言う。

「肉じゃが的な物とサラダに決まってるじゃない！」

そこまで言うとうーの目がキラッと光った。それをばっちし見ていたエルとミウロ。（リーフは後ろで踊ってるし・・・）

「まさか、」

ゴクとミウロはつばを飲み込み、エルは（何?!）とユーを凝視している。しかし、ユーの頼み事は想像していたものよりけっこう穏やかだった。

「ミウロ、食材探してくるからあんだ火の番お願いね。それとエルとリーフはうちを手伝うのよ。」

一同、しーん。

「なによ。あんた達。」

ユーの態度は一変し冷たい言葉を吐いた。それで、はっとなったミウロは「お、おう!」と返事をしてエルとリーフも

「分かった!」

と元気よく返事をしたのだった。

それからユーの料理といえば、今回もひどい。

とうぜん肉じゃが的な物には決して見えないへんな緑色の泥の中に不気味な色のキノコ

が入っているし、サラダなんかなぜか真っ黒焦げになってて、その上にエルの顔くらい

ある大きなキノコがのっかっていたからたまったもんじゃあない。

「うっ、なんだよこれ、くさいよ」

ミウロは自分の前に置いてあるその料理の異臭におもわず鼻をつまむ。エルも今置かれた料理のくさに口と鼻を覆う様に手でふさぐ。

「本当だ。ねえユーこれ食べれる・・・わっ」

エルは後ろを振り返ってその次の言葉は出さなかった、それはやっぱりミウロとエルの後ろにいたユーがゴゴゴゴゴ!と怖いオーラを

出していたからだ。

「わぁあー。食べます食べます！」

エルは何か攻撃されるのかとびりり、急いで料理を食べ始めようとした。しかし、やっぱりおいが……。

「リーフは、食べれる？」

「うん！めっちゃくちゃうまいぜ！！」

おいしそうに食べるリーフを見てエルはちょっと尊敬してしまった。

「リーフが言うなら、オイラも！」

パクッ

取りあえず勇気を出して一口。

「ええ！」

あまりのおいしさにびっくりしてしまった。あまりにも食べれなさそうな物の方がユーの場合おいしいのかもしれない。

「おいしい！」

もうにおいなんて気にならなくなったエルは空腹のあまり一気に料理を平らげていった。

「うくく。」

みんなが騒ぐ中、ミウロは突然の苦しさにつずくまった。

「あつミウロ！大丈夫?!」

エルがミウロの状態にきずき、自分の座っていた所をはなれ、ミウロの所へ行く。それに続いてリーフも「どうしたんだ?!」と来てユーも「何かあったの?」と三びきでミウロを囲む。

(この苦しさは、あの時と同じ)

フラッシュバックのように流れる底なし沼で感じた苦しさの時の事がミウロの脳裏に走った。と思うと次はパッと一瞬だったのだが何かが見えたのだ。

(これは・・・)

見えたのはペンキで塗りつぶしたような真っ暗な場所、そこでゾッとするようなうなり声が聞こえた。

「わああ!」

まるで悪夢で目が覚めてしまった人のように、ミウロは怖さのあまり飛び起きた。

「わっ、突然何よ!」

さっきまでうずまっていたミウロが突然勢いよく立ったので、三びきはちよっとびっくりしていた。

「ミウロ、お前何が見えたのか?」

と感ずいたリーフがミウロに聞く。ミウロは「うん。」とうなずき、

さっきの事を全部話そうとした。でも、なぜか言いたくなかった。それはミウロ自身も分らない。

「・・・・・・・・」

しばし、沈黙が流れた。

「言えないの？」

とエルが心配そうにミウロの顔を覗きこむようにして言った。

「・・・今は言えないな、思い出したくないのかも知れねえ。」
と言うと顔をあげ、ははっと笑った。

「そうか、そうだな。ごめん！ミウロ。さっきは聞いちゃいけない事言ってしまったさ。」

リーフはボンとミウロの肩を軽く叩いた。

「うん。いいよもう。それよりこの変な臭い料理をさっさと平らげなくちゃな。」

ミウロは笑顔でそう言っていると、今度はエルが苦笑して肩をつついてきた。

「ん？」

「後ろ」

エルは小声で言う、ミウロはその通りに後ろを振り向くと笑顔のユーがいた。でも、ユーの気持ちは逆で「あーんーたねえー！」と

『シードフレア』の準備を！

「ひっ非難！」

二ひきはすっ飛んで行く、でもミウロは動けなかった。それはユーにしっかりと前足を踏まれていたからだ。

「あんたは、これでもくらうときなさい！」

シュウウ、ドツカアアアン！！

黄色い大きな光と共に物凄い音がジャングル中を響かせる。それは、洞窟で寝ていたリングマがその音で飛びあがってしまうほどの音だった。

煙がはれる、ミウロはなんとか無事？だった。まあ気絶はしているのだが。

「ふう、ちよつとやりすぎちゃったかしら」

周りの木達が全部倒れていて川が干上がっている周りのあり様を見てユーが呟いた。

「全然、ちよつとじゃねーだろ・・・」

ミウロは倒れてピクピクと体を震わせながら、そうつつこんだのだった。

続きます！

第二十七話 みんなでサバイバル!? 後編(後書き)

よっしゃ、おわった!

ユ一「それだけ?」

・・・いいじゃん

おしらせ

このサイトは久しぶりな空です。なつかしー（（（

おーいみんなー、ちょいつとこいや

ミウロ「なんだ？」

エル「あ、もしかして・・・」

ユー「この小説」

リーフ「終わるとかあ？！」

なんとということでしょうか。リーフの言うとおり両立難しくなったので、中途半端ですがおわることになりました。

ミウロ「はあ？？」

エル「そんな」

ユー「ポケモンノベルでいっぱいいっぱいなんですよ？」

リーフ「ふざけんな！」

はいはい、静粛に！

違う形で中編くらいでまた出るかもしれないし、いいじゃん！
もしそうじゃなくても君ら違う形で出てくるから

ミウロ「そんなこと言って、思いつきじゃんか！」

ですね・・・。

すみません、そういうことで、完結いたします。

それでは、また会う日まで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6018m/>

ナーフフィア～三びきの勇者たち～

2011年10月7日13時56分発行